

『弱め』な大黒柱

レスト00

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんとなく浮かんだものを話の触りだけですが文章化したので載せてみます。気が向けば読んでください。

作者は戦車関係ニワカです。あと、今回は一応設定ある人の改変になるのでそれでもいいという人向けです。

続きは未定です。

※16／11／2

タイトル変更しました。旧題「馴れ初め」

目次

馴れ初め	1
逢瀬	6
邂逅	12
プロポーズ	19
家族	27
始まり	31
新生活	37
学園生活	42
旧知	47
説教	55
親御	60
来襲	66
親子	73
集合	79
逢引	84
花	89
親の心	96
縁	101
奇な物乙な物	107
番外編：超展開FGO編	112
耳	121
番外編：ボコ	125

馴れ初め

人間が生きるためには、何を必要とされるだろうか？

現代の社会であれば、お金が必要であると答える人が多いと思われる。

一昔前であれば、衣食住という人も多かったと思う。

そして、歴史の教科書に載っているぐらい昔であれば、日々の糧である食べ物と答える人もいたでしょう。

多かれ少なかれ、人間は生きるために必要とするために必要なものを言えと言われれば、一つか二つ答えるだろう。

だが、現代を生きるある一人の男性は違った。

彼は生きるために必要なモノが「多すぎた」。

生まれつき砂糖菓子のように脆い体は、満足に歩くこともできず、移動には必ず車椅子か、杖を使わなければならない。

普通の人のものよりもあまり機能していない臓器のせいで、一般人が当たり前のように食べることができるものも食すことはできず、いつも彼が食べられるものを特別に用意されていた。

あまり光を捉えてくれない目は、強い光を直視することもできず、ただ朧げにモノの輪郭を伝えることしかしない。

不定期的に引き起こる発熱や体調不良は、下手に拗らすと命取りになってしまう為、四六時中とは言わないが、多くの時間傍に居てくれる誰かが必要になった。

そんな生きるために多くのものを必要とする彼にも優れた部分があった。

あまり見えていない目のせいか、その分を補うように耳や触覚と言った元々人並であった部分が補強されていたのだ。

だからだろう。ろくに学校に行くこともできず、一日の大半を自室のベッドで過ごす彼が音楽や本といった文学などを含む、芸術関係に興味を持つにいたったのは。

音楽はスピーカーから流れてくる音を聞けばそれだけで嬉しくなる。

文学は点字を指で読み、文字通り自身の知らない世界を手探りで広げていくから楽しくなる。

今まで彼の生きること、に精一杯であった姿しか見ることのできなかった両親は歓喜した。幸いにも一般家庭の中ではどちらかといえば富裕層である彼の家では、そう言ったサブカルチャー関連の物品を手に入れるには苦勞しない程度の資金はあったため、彼のそういった部分の才能は面白いぐらい伸びていった。

特に音楽関係の伸びしろは大きかった。最初は真似事のようなものであったが作曲を始め、通っていた病院の小児科の子供たちにその歌を聴かせたりしていく内に、自然とその実力は上がって行き、両親の勧めに乗りレコード会社に作曲した曲を持ち込むと短い期間ではあるが、ローカルのCMのBGMに使用されたりと、既に成人の年齢に近かった彼にも収入源ができた。

これにより、これまで両親に迷惑を掛けるしかなかった彼にも生きるための活力が沸く。決して多くはないが、少なくとも収入の中で作曲をしていたある日、その音は彼の耳に滑り込んできた。

「？」

「どうかしたの？」

ぼんやりとしか見えない目でも、既に二十年近く生きてきたため慣れた手つきで楽譜に音符を書き込んでいた彼が、その部屋の窓の方に顔を向けたことに彼の母親はどうしたのかと訪ねていた。

「すごく力強い音が聞こえて」

「？………あ、ああ、そう言えば今日は波止場の方の街で戦車道の試合があるのよ」

最初は何のことか全くわからなかった彼女は、合点がいったように説明を加えた。

母には聞こえなかったらしいが、自分には確かに聞こえたその音が彼にはひどく興味を覚えた。

「母さん、戦車道ってなに？」

作曲の手を止めてまで尋ねてくる我が子に少し驚きながらも、彼女は説明した。

曰く、女子が行う武道の一つ。

曰く、戦車に乗り込み、お互いに切磋琢磨し合う乙女の嗜み。

曰く、学園艦それぞれに学生のチームがある。

等等など、要点を抑えるとそう言った説明を聞いた彼はその戦車道の“音”を聞いてみたいと考えた。だから、母親に次に言うことは決まっていた。

「母さん、それって僕でも見に行くことはできる？」

戦車道・試合会場

彼にとっては珍しい部屋の外へ向かう為のワガママは、幾つかの約束事を取り付けた上で承諾された。約束事といっても、病院などに行く際にも気を付けていることを少し大げさに言っているだけであったので、外出自体は実にスムーズに行われた。

既に愛車といってもいい車椅子に乗り、母に押されながら試合のために設置された特設の観客席の隅に移動する。

「誘導ありがとうございます」

母が案内をしてくれた係員にお礼を言っている中、彼は既に試合の音に自身の意識を集中させていた。

会場に集まる多くの観客の声援も耳にも入らず、それぞれどこか試合の映像を映している大型スクリーンのスピーカーからの音も聞き流し、今この瞬間躍動させるような力強い音を生み出す戦車の生の音を彼は確かに聞いていた。

「ああ——すごい」

陳腐な感想が彼の口から漏れる。

だが、それ以上の言葉を挟めばどこか無粋なようで、短くも確かな言葉がその音には似合っていると彼は感じていたのだ。

戦車の一台一台それぞれに固有の音がある。それが一つの大きな演奏を奏でる。その力強くもリズムミカルな演奏に彼は動かせない身体ではなく、心を躍らせていた。

試合自体はスピーディーに決着した。

今回の試合は社会人ではなく、学生のものでそこまで大規模なものではなかった為、早期の終了に彼は先ほどとは違い大きな落胆の気持ちを抱く。

特に一番心地よい音を聞かせてくれた一両は何時までも聞いていたくなるほどだったのだ。これまで、自分の中のなかった音を聞いたせいか、彼はこれまでよりも積極的に自分の願いを口にする。

「母さん、選手の人に会うことってできる?」

「え?それは……」

「できますよ。試合後は基本両チームの交流の為にある程度その辺りの人の行き来がゆるくなっていますので。それに今回は学生のチームでも練習試合ですから」

彼の疑問に答えたのは、退場するときにも手伝うために付いていてくれた係員の人であった。

そして係りの人に再び誘導され、彼はお目当ての一両を目指して選手と戦車の待機場場になっていく広場に到着する。

そこではお互いの検討をたたえ合う両チームの選手たちがいた。

未だ全ての戦車が帰ってきていないのか、広場の方に帰ってきている車両もちらほらある。その中の一台の音を耳にした彼はその細い腕で車椅子の車輪を押し、自分の力でお目当ての戦車に近づいていた。

明らかに母が押したほうが速い速度であったが、彼が到着する頃には丁度その戦車が停車する場所であったのでちょうど良かったのかもしれない。

「ハアハア………あのー!」

普段から運動していない体で、しかも病弱といっても過言ではない彼にとつて自身の車椅子を進めるだけでも重労働であるため、人生でも数えられる程度にしか経験していない息が上がるという状態で、彼は大きな声を出す。

戦車を止め、中から出てくる女子高生は不思議なものを見るような目で彼を見る。その視線に乗っている感情は、困惑や驚きであった。

「あ、貴女たちの音はとても素敵でした!」

とにかく、自分の感じた“それ”を伝えたくて、自身の内にできた。彼女たちがくれた想いを知って欲しくて、遮二無二口を開いた。

もちろん、彼の音に対する感性を知っているわけもない彼女たちの困惑は大きくなる。そんな中で代表するようにその戦車の機長である一人の女生徒が彼の車椅子の前でしゃがみ、目線を合わせるようにして尋ねる。

「音？」

「えっと、その自分は目があまり見えなくて、でも、耳はよくて。それでこの戦車の音が試合の中で一番綺麗で」

緊張と焦りから考えを纏める前に口から言葉が出て行く。そんな経験は初めてで、彼はますます焦ってしまいが、その想いは確かに目の前の彼女に届いていた。

「ありがとう」

「——あう」

その言葉が嬉しくて、目が見えないことを思っつか握手するようにして自分の手を取り、感謝の気持ちを伝えようとしてくれる彼女の優しさに彼の緊張はピークに達する。

元々小柄な体躯で、見ようによつては小学生か中学生にしか見えないう彼が顔を真っ赤にして緊張している姿にその場を見ていた他の学生も緊張を解き、微笑ましいものを見るような目で見ていた。

「あの、その……貴女のお名前は？」

緊張の中、なんとかかひねり出した言葉は初対面の人間が一番初めにする挨拶であった。

一瞬きよとした彼女は、微笑みながらこう答えた。

「初めまして、西住しほと言います」

それが未来で夫婦となる二人の馴れ初めであった。

逢瀬

自宅

筆が踊る。

音符が舞う。

リズムが響く。

いつもよりも軽快で、それでいてするすると浮かんでくるその音を、紙の上に生み出していく。

それは歌うようであり、描くようであり、そして祝福するような作曲であった。

初めて戦車道を「聞いて」から数年。彼は作曲家として注目を浴びていた。

最初は万人受けするものではなく、幼い子供や女性が好きそうな優しい曲を多く描いていた彼は、戦車道と出会ってからは少しだけその曲調を変える。

これまでと同じく、聞いていて落ち着くような優しい曲ではあるものの、どこか「力」を感じるものになったのだ。

これまでの曲がただ見守るだけの優しさを感じさせるのに対し、それからの曲は一步を踏み出そうとする人の背中を押してくれるような、そんな力の籠った優しさを感じさせるものとなる。

定期的に持ち込みを行っていたレコード会社は、彼のその新境地の曲に関心を寄せるのに時間を必要としなかった。

学園艦に乗船し、一人暮らしを行う学生が多い昨今、彼が作る応援されるような内容の曲は受けがいいと、その会社の役員は考えたのだ。

とはいえ、無名に近い作曲家の曲を有名な歌手に使うにはハードルが高かった為、そのレコード会社に所属する駆け出しの歌手にその曲は託されることとなる。

そして結果が出るのは早かった。

当初は歌い手も作曲家も知名度が低く見向きもされなかったが、以前と同じくテレビのCMに採用され、それが流れると興味をもった視聴者からの少なくない問い合わせが寄せられた。

それと、その歌い手も彼に負けず劣らずの金の卵であり、彼と直接会い、話し、そしてお互いの気持ちを理解することで、より一層彼の曲に対する表現力が上がっていった。

そして、彼は作曲家ゆえに顔を出すことはないが、名前がある程度売れるほどになっていった。

そう言った劇的な変化は彼の環境も大きく変えていったが、変わらないものもある。

「お久しぶりです」

「いらっしやい、しほさん」

それは戦車道と出会ったあの試合で知り合いとなった西住しほと交流であった。

あの試合以降、彼は作曲作業の合間に彼女所属チームにファンレターのような手紙を定期的に送っていた。幸いにも、彼女の所属する学校は彼のそう言った行動を咎めることをしなかった。そしてまだ彼が作曲家として駆け出しであった頃に彼の仕事を知った彼女たちが彼に応援歌の作曲を依頼し引き受けるなど、一ファンではなくそれよりは一步進んだ付き合いを行っていた。

そして、特に彼とチームの窓口となっていたしほが学生から社会人になってからも、プライベートな時間に彼と会うことや、手紙のやり取りを続けるのは至極自然な流れであった。

「今日は体調も良さそうですね」

「はい、作曲の方も筆のノリが良いです」

会話を続けながら、しほは彼の手を取り、自分の顔にその手を導いてやる。

お互いに慣れた動作であるため、慌てることもなく彼の手はしほの頬に添えられるようにして到達した。

「……………んう」

「あ……………くすぐったいですか?」

「少しだけ……でも気にしないで構いませんよ」

彼が何故しほの顔に手を置いているのかといえば、彼女の表情を手で「見る」ためである。

彼が彼女と話すようになってから、彼は特に他人の声に敏感になった。それは色々と身体にハンデのある自分と会話してくれる相手に対し、表情が見えない分、声で相手の感情を察しようとしたからだ。作曲と言う芸術関係の分野に手を出していたせいも、常人よりも声で感情を凶るといふ行為は彼が自分で思っていたよりもよくわかるようになる。

だが、しほと定期的に喋るようになってから、その行為がひどくもどかしい気持ちを生み出し始める。

彼はしほの事を声から感じ取れる以上に知りたいと思ったのだ。

大胆なことに彼はそれをしほに直接告白した。

小説などで読んだ赤面するという行為を顔に熱が集まることで実感しながら、彼はしほの言葉をまった。

だが、言葉よりも先に手に感触が返ってくる。

「えっ？」

喉から絞られたような声が漏れる。

気付けば、今と同じようにしほが彼の手を自身の顔に導いていた。

それは初めて出会い、初めて彼女と会話し、そして初めて彼女の手を握った時以来の肉体的な接触であった。

「これで私の表情が「見え」ますか？」

この時、しほは動揺したような声を全く出さなかったが、彼以外にその場に誰かがいたのであれば、彼女の事を微笑ましく見ていただろう。

何故なら、彼女の顔も彼に負けず劣らず真っ赤になっていたのだから。

そんな初心な反応も少なくなってしまうた今、彼はしほに恐る恐ると言った風に口を開いた。

「あの、しほさん………尋ねたいことがあるのですが」

「どうかしました？」

自身の顔に添えられた彼の手のスベスベとした感触を若干楽しみながら、しほは質問の先を促した。

「以前、その……えつと……戦車に乗せて頂いた時の事なのですが……」

「ああ」

尻すぼみになっていき最後の方はよく聞き取れなかったが、彼が何を訪ねたいのかをしほは察する。

以前、しほが所属する社会人チームの戦車道の演習を彼は見学に行つたことがあつた。

その時、チームからの好意で彼はその所属チームの戦車に搭乗させてもらうことができた。

その時はほぼドライブ感覚であつたので、特に使用することもない装填手の席に彼は座つた。

そして、発進後間もなく彼の異端性が色んな意味で発揮された。

騒音の響く車内で、集音マイクを使っているでもないのに、彼はそこから数百メートル離れた場所で砲撃戦をしている別の車輛の状況を音だけで正確に把握し始めたのだ。

そして、それから数分後彼は通信士の席に座る女性に声を張り上げた。

「演習の中止を！エンジンの音がおかしい!!」

もちろん、そんな言葉で止まることはない。だが、その数分後に彼が聞いていた音は確かなものであつたことが判明する。

演習中の車輛の内の一両のエンジンが火を噴いたのだ。

未だに原因不明となつているが、その事故による死傷者はゼロ。競技用の安全対策が十分であつたことと、乗り込んでいた人員がそれなりに事故に対する耐性があつた為、惨事が起こることはなかった。

その事故により演習は中止。無事な車両も全車点検と整備を行うこととなつた。

そうしてその日の見学はお開きになれば話は終わるのだが、彼の音以外の異端性が最後の最後に披露されてしまう。

乗り物に乗ること自体はなれていたのだが、戦車という悪環境に近

い車内でそれなりの時間籠っていたことで彼は体調を崩し、熱を出してしまったのだ。

ある意味で事故以上にてんやわんやとなり、彼はそのまま近くの病院に搬送されることでその日の騒動は終結をむかえた。

後日、彼が母親から説教をもらったのは言うまでもない。

「あの後、皆さん大丈夫でしたか？その、自分の事を気にしていたりしませんか？」

「気にしていないといえば嘘になりますが、軽く心配している程度です」

自分の事を卑下するような物言いに眉を顰めそうになるがいつもの表情で簡潔かつ簡単に答える。

実際、彼の体調の事をしほはチームのメンバーにしっかりと伝えていたため、そう言った意味で過度に彼を気にしている人はいなかった。

「寧ろ、貴方が搭乗者でも気付かなかった音を聞き分けた事の方が話題になっていきますよ」

口の中で呟くようにしほはそう言葉を零した。

そして、彼女は改めて彼の方に視線を向ける。あの時、戦車の中でぐったりとしている彼を車外に運んだのは他でもない彼女だ。

そしてその時も今も、強く握ってしまえば折れてしまいそうなその細腕を見ていると、しほは彼から目を離すのが怖くなってしまう。

彼女にとって、彼は少し特殊な存在だ。

あの時、戦車道の試合を見に来た観客の中で唯一『西住』と知らずに接してきた男性。

そして、西住流のやり方ではなく、自分が乗っていた戦車チームの全員を褒めてくれた人。

そう言った人と戦車道の場で会うのは彼女にとって初めての経験であった。

そして付き合いが長くなるうちに、彼の存在が彼女の中では他の人よりも大きくなっていった。それは今も変わらない。

「しほちゃんさ。」

「ん……すみません、少し考え事を」

しほはいつの間にか沈んでいた思考の海から彼の言葉によって引き上げられる。

そのしほの反応をどう受け取ったのか、彼は大きくも腕で、しほの頭を自分の手がそうされたように、自身の胸に導いてやる。

「……………え？」

最初、本当に何をされたのか分からず、しほはそんな言葉を漏らすしかできなかった。

「いつもお疲れ様です、しほさん」

彼の手はいつの間にか頬から、後頭部に移っており、そのしほよりも華奢で白い手は優しく彼女の髪を梳いていく。

しほは自分よりも身体も小さく、弱気なところもあるその年上の男性の包容力に抵抗することはできなかった。

そして、いつも内心で嬉しくて堪らなくなっている、自身の頬を触る彼の手が自分の頭にあることに感謝する。

何故なら、どうしても分かってしまう程に緩んだ頬と、赤くなっているであろう顔の熱がバレないで済むのだから。

邂逅

「困りました」

口からポロリとそんな言葉が漏れる。

聞き慣れない音が溢れる場所で、車椅子に座る彼は途方にくれていた。

「外出に慣れたとはいえ油断していましたね」

心情を吐露したせいかわ、自嘲気味な言葉が堰を切ったように口から出てくる。不安な気持ちを誤魔化そうとしているようにも見えるが、言っている本人の頭の中ではそれどころではない。

色々と身体的ハンデがある為、外出はもちろん、普通に生活するのも十分気を付けなければならぬ筈の彼は土地勘のない屋外で何故こうなったのかを思い出し始めた。

事の始まりはいつもの作曲の仕事であった。

これまで作曲を行う上で、顔出しや取材と言ったものをほとんど断ってきた彼であったのだが、ある映画のテーマソングとBGMを請け負ったことでそうもいかなくなってしまった。

その映画はその年のある映画コンテストの楽曲部門で賞を取ってしまったのだ。

これには事務所も彼本人も、そして彼の家族も仰天するしかなかった。そしてこれまで顔出しを控えてきた彼の事を知りたいと考える映画ファンや、元々彼のファンであったリスナーたちが所属となっているその事務所に問い合わせを殺到させた。

このままでは、いつ彼の情報が漏れ自宅の方までマスコミの手が伸びるのは時間の問題と危惧したその事務所は、彼と彼の両親を説得し、その映画の授賞式に出席させることにしたのだ。

このことに対し、彼の両親は最初渋った。何故ならこれまで顔出しを避けてきたのは、そういったことを行い彼がストレスを抱え、体調を悪くすることになるかもしれないからだ。

もちろん、事務所側もそれを十分理解した上での苦肉の策なのである。なので、お互いがお互いに彼の事を慮った上での意見であるので、引くに引けなくなってしまうていた。

そこで妥協案として、その授賞式には出席し、関係各者に挨拶は行おうが、本番で壇上に立つのは監督に行ってもらうというものであった。

もちろん、その際にはマスコミにも事情を事前に説明し、出席者として彼を映すことは許可するが、彼が作曲家であると判別できるテロップは流さない事を確約させることを徹底させることに相成った。そして、いつも行動している範囲から大きく離れた地に彼は向かうことになる。

「浮かれてしまっていたのかな？」

そこまで思い出し、自省の意味も込めて呟きながら少し心を落ち着かせる。

それを助長させるために二度三度と深呼吸。そうしてから、彼は車椅子に付いている収納ボックスからある紙束を取り出す。

それは点字で書かれた手紙であった。

「しほさんに会いたかったとは言え無茶でしたね」

その手紙には、送り主であるしほが行う次の戦車道の試合の日程と場所が書かれていた。そしてそれは、偶然にも映画の授賞式の会場の近くで、且つ日程も近かった為足を伸ばせば出会うことができる事を表していたのだ。

これを知った時、彼の心は生まれて初めての悪戯をしたいという気持ちを抱く。

もちろん悪戯といえど、相手を困らせる類のものではなく、相手を驚かせるためのものだ。所謂一種のサプライズである。

それは事前連絡を行わず、戦車道の試合を行っているしほに会いに行くと言う可愛らしい内容であった。

「連絡をしようにも、皆さん明日の準備で忙しそうでしたし……第一、公衆電話ありませんし」

いつもであれば必ずどちらか片方ついてこようとする両親は、今回

に限って恩師の訃報により、彼の世話を事務所の人たちに任せることにしてついてきていない。そして、この日は一日ホテルで大人しくしている。彼本人が事務所のスタッフに伝えている為、今彼が屋外で迷子になり困っているのは、ある意味自業自得であった。

「車輪の感触から未舗装地ですね……………本気でどうしましょうか？」

彼の感じたとおり、彼が今いるのは街中ですらない。

それ程深いというわけではないが、人通りがあるような場所ではない林の中なのだ。そして、知り合いに連絡を取る手段すら持ち合わせない彼は途方に暮れるしかなかった。

「ふう……………ん？」

葉と葉が擦れる音をBGMに小休憩をしていると、彼の耳がある音を拾う。

「微かだけどエンジン音……………軽い音だから乗用車かな？」

兎にも角にも、今のところ唯一頼れる音を拾った彼はそちらの方に車椅子の車輪を転がす。

決して早いとは言えない速度であるが、確かかつ安全に進んでいく。それに連れ、彼の耳はその手掛かりとなる音を決して逃さないようにしっかりと、空気の振動を捉えていく。

「エンジン音が止んだ……………これは……………草を踏む音？」

普段、舗装された以外をであるかない為、自信を持って断定はできないがそれは確かに人が地を踏む音であった。

「と、うわ……………光が……………」

林を抜けると、彼からは見えないがそこは広い草原であった。

これまで木の葉によって遮られ、木漏れ日程度になっていた日光が遮蔽物をなくした彼を照らし出す。

雲も高く、快晴と言えるほどに蒼い空から降り注ぐ光は、以前よりも光を捉えられなくなってきている彼の目でもしっかりと判るほどであった。

「どなた？」

日の光に思わず車輪を止めてしまった彼に、鈴を鳴らしたような女

性の声が届く。

「あ、えと、こ……」

「こ？」

どうやら、音を聞くことに集中していた彼は、どの位その音に近づいていたのかを把握していなかったようだ。不意打ちにも似たその邂逅に、元々人見知りの傾向にあった彼は、クタクタになってきている体のことも忘れ、どもった声を出してしまう。

「こ、こんにちは？」

なんとか捻り出した言葉はそんな当たり前の挨拶であった。

「……はい、こんにちは」

こういう時、いきなり語彙が乏しくなるのはコミュニケーション障害なのだろうかと思いはじめの彼に対し、挨拶をされた彼女は、最初こそ面食らっていたが、仕切り直すように彼に近づくと丁寧に挨拶を返す。

「地元の方ですか？ここは明日戦車道が行われるフィールドですから勝手に入ってしまったては怒られてしまいますよ？」

注意する、というよりは悪戯を見逃そうとしてくれる大人のようにそう語りかける彼女は、車椅子に座る彼に視線を合わせるようにしてしやがみ込み。

「！」

そこまで近付いて、彼の目が自分に焦点を当てずに自分の顔のある方に向いているだけであることに彼女は気付く。

「えっと、その言い方だと……その、選手の方ですか？」

「え、あ、そうです。あす試合を行う選手の一人ですよ」

恐らく自分の目やその他諸々について、動揺させてしまったであろうことに少しの申し訳なさを覚えながら、彼は恐る恐る尋ねる。

ハツとするようにして、彼女は肯定の返事を慌てるように返していた。

「なら、申し訳ないのですが——」

「島田隊長！地形の確認終わりました、よ？」

頼み事を口にする前に、複数の足音と大きな声が近付いてくる。声

の方は尻すぼみになり、発音が疑問系の上がり気味になっていたが。「た、隊長が！男の子を口説いている!？」

(……………ん？男の子?)

既に二十代後半になっているにも関わらず、見た目が中学生で通用しそうな容姿をしている彼は、その近づいてきて一方的に驚いている彼女たちの物言いに引っかけかりを覚えていた。

「ハア……………貴女たち、失礼な事を言っていないで車をまわしてきなさい。彼は迷子みたいだから運営会場の方に送っていきますよ」

「え?」

自分の隊の隊員の物言いに呆れつつ、彼女は告げる。決して大きな声ではないが、よく通る声で告げられた言葉に従い、複数の足音が遠ざかる音が聞こえてくる。

そして、告げられた内容に彼は困惑した。

「流石にこのままここに置いて行くわけには行きません。お小言は言われてしまうかもしれませんが、私たちについてきてくださいね」

「あ、ありがとうございます、えつと——」

「千代、島田千代です」

叱るように、しかし、心配もするような彼女——島田千代の優しい声音に彼は感謝の言葉を返した。

そしてそれから数分もしないうちに、彼女たちの乗用車であった10HPテイリーが彼のすぐそばに停車し、手際よく乗り込んでいくのであった。

その際にスペースの関係上、車椅子は折りたたまれ、彼は荷台の中に座ることになるのだが、乗り込む際に千代にお姫様抱っこされたのは本当に余談だ。

「それにしてもどうしてあんな所にいたのですか?」

「えつと、知り合いがこのあたりに来ていると聞いたので、会えないかなど」

色々と省いていて、無理のある説明であったが千代は特に気にした風もなく普通に納得していた。

「多分、どこかで道を違えたのかもしれませんが」

「あ、あはは」

本当のことを言うのはバツが悪い彼は、卑怯だと思いつつも曖昧な笑いを返すしかなかった。

「でも、少し厳しい事を言わせてもらいますが——」
「え？」

そう前置きしてから千代は表情を引き締めて口を開く。

「貴方は自分の身体のハンデをちゃんと理解していますね。なのに一人で出歩くのは危ないと思わなかったのですか？」

「……………反省も後悔もしていません」

「いいですか？ 貴方は自分だけのことだと思っっているかもしれませんが、貴方の家族はもちろん、貴方の知り合いも貴方に何かがあれば悲しいし、心配もするのです。それをよく考えなさい」

「……………はい」

そこまで言って、彼女はこれまでの厳しい顔を緩め、微笑むと優しく語りかける。

「貴方はまだ幼いのですから、大人に頼ることをするのは恥ずかしいことではないのですよ？」

「……………ん？」

「ん？」

最後の言葉に思わず素っ頓狂な声が漏れた。

何か誤解されていると思った彼は、財布から身分証である保険証を取り出し、彼女に見せる。

「多分ですけど、僕は皆さんよりも年上ですよ？」

その発言と証明している身分証に目をパチクリさせると、数秒後その車に乗る女性陣の絶叫が響いた。

そんなこんなで荷台で揺られること二十分程、車は会場の設営を行っている運営会場の方に到着した。

「お世話になりました」

「あ、いえ、こちらこそ失礼な物言いをしてしまい」

会った時とは逆に、今度は千代が少しおどおどしている。

そんな彼女の態度の変化に苦笑しながらも、彼は彼女に手を差し出

す。

「あなたの言葉は有難かったです。またご縁があれば、その時に」

「あ、はい」

二人は握手を交わす。

その時、千代は握った彼の手が戦車道をしているとは言え、女性である自分の手よりも細く薄い手に壊してしまいそうな華奢さを感じた。

「あ、そうだ」

握手を終えると、彼は思い出したように車椅子から小さい長方形の平たいケースを取り出した。

「ここには、仕事で来たんですけど、初めて作ったものです。どうぞ」
そう言って彼はケースの中から名刺を取り出し彼女に渡した。

その見た目小柄な中学生のような社会人の男性からの名刺に、彼女は面食らいつつもそれを受け取る。

「あ……………それでは僕はこれで、ありがとうございました、千代さん」

「……………あ」

何かに気付いたのか彼は挨拶もそこそこに、車椅子を走らせていつてしまう。

その後ろ姿を見送りつつ、彼女は自分よりも年上で華奢な男性を想う。彼を意識して感じるのは、傍にいてあげたいという願望といつ壊れてしまうのかという不安だ。

たった数十分の邂逅であったが、その数十分だけでも彼は島田千代という女性を信頼し、頼った。その事実がとても心地よく感じるのだ。

「……………これが母性というもの？」

ちよつと迷走気味な思考に振り回されている彼女が、自身の家のライバルである女性と彼を取り合う間柄になることをまだ知ることはない。

だが、名刺に書かれている名前が、自分の尊敬する作曲家のペンネームであることに気付くのはあと数分後。

プロポーズ

「私と結婚してください」

ある休日の昼下がり。

日当たりの良い自室の部屋で昼食後のお茶を飲んでいた彼に、西住しほはそう言った。

「……………え？」

目をパチクリさせる。

普段からおっとりしている彼の頭は、彼女のその言葉——プロポーズを上手く理解できないでいた。

「私、西住しほは貴方のことを愛しています」

どこまでも真っ直ぐに、正面からぶつかるといふように言葉を続ける。

それは彼女の家、西住家における戦車道の教え。『撃てば必中、守りは固く、進む姿は乱れ無し、鉄の掟、鋼の心』を地で行くようである。どこか自信満々に言い切る彼女の姿は、威風堂々という言葉がよく似合う。もちろん、それは外側だけの話であるが。

内心で彼女は緊張のピークであった。

そもそも彼女がプロポーズに踏み切ったのは、彼の人脈が以前にもまして広くなっていて、焦りを覚えたからだ。

それ自体は寧ろ、喜ぶべきことだ。だが、それに付随するようにして、彼を知る女性が増えていく。

作曲の仕事では、彼の所属する事務所のアイドルや女性歌手が歌のために彼とマンツーマンで話すことも少なくない。そして、プライベートでは戦車道の試合を見に行き、何故か高確率で色んな選手と仲良くなって帰っていくのだ。

念を押すが、彼の交友が広がっていくこと自体はしほにとっても嬉しいことだ。だが、自分よりも年上であり、そろそろ三十路になりそうな見た目中学生な彼はそう言った意味でもいつ結婚してもおかしくない。

それに気付いたとき、彼女は彼の隣に自分以外の誰かがいることを

想像した。

それは酷く不愉快だった。それと同時に酷く怖かった。そうなってしまうえば、自分と彼は疎遠になつてしまふのではないのかと。

その考えに至ると、彼女の思考は一直線である結論に至る。

「プロポーズしよう」

未だに告白すらしたことのない彼女の思考は中々にブツ飛んでいった。それほど焦つていたといえ、わからないでもないが。

「……………」

沈黙が支配する部屋。

しほはプロポーズ兼告白の言葉を言つてから、じつと彼を見つめている。それは例え、結果的に拒絶されるのだとしても、正面から碎かれたいという彼女なりの意地の現れである。

だから、彼の異変にすぐに気付くことができたのは当然であつた。

「結婚……………結婚……………結婚……………」

少し俯くようにしていたため、彼の表情は髪に隠れ、しほからは見ることができないでいた。だが、彼が何度も同じ単語を呟き、それが繰り返されるたびに彼の体が震えだしていくのは聞いて、見て、気付く。

「大丈夫——」

「ひっ」

その彼の様子が明らかにおかしく、これまで見たことのない反応であつたために肩に手を起き言葉をかけようとするしほ。

だがそれは引き攣るような短い悲鳴と、その細腕からは考えられないほどの力で払われた腕により、最後まで言い切ることができなかった。

「え？」

「あ、う、ああ」

お互いに信じられないものを見たという表情で見つめ合う。

しかし、その沈黙は長くは続かない。

数秒前の自分が何をしたのかを理解したのか、彼の顔から血の気が

引いていくのが見て取れる。

いつもよりも明らかに大丈夫ではない顔色のせいか、それともこれ以上は耐えられないと判断した体のせいか、彼はそのまま、倒れるように気絶した。

「え、あ、つ、紬さん！」

その彼の反応に傷つくべきなのか、泣くべきなのか、頭が判断を下す前にしほは彼の母親の名前を大声で呼んでいた。

「しほちゃん、何があつたのかしら？」

彼の行きつけの病院。その中で経営している小さな喫茶店のボックス席。そこで向かい合うようにしほと彼の母親である紬は座っている。

今、彼の検査結果が出るまで待つために、そこで何があつたのかを紬はしほに問いただそうとしていた。

「……………その……………」

「言いつらいこと？」

紬の声に咎めるような響きはない。どちらかといえば、強引に聞き出すことで相手を傷つけてしまわないかという戸惑いの方が強い。

それを感じたしほはこの親にしてあの子ありと、どこか場違いな事を思う。それと同時に目の前の女性に内容を言わないことを後ろめたく感じてしまい、しほは少し重くなった口を強引に動かし始めた。

「彼に……………あの人に告白を……………プロポーズをしました」

「……………まあ」

それをした時の潔さはどこに行ったのか。そんな疑問が出てくるほどに弱々しい声だった。

一方でそれを言われた紬の方は少し驚いた表情をしたあとに、納得したような表情に変わり一言声を漏らす。

お互いに気心知れた仲とまでは言わないが、それなりに親しい付き合いをしていたこの二人。それでも、しほは今回の彼の体調の悪化の原因が自分であるという事実は後ろめたかった為、目の前の母親からどんな叱責の言葉を投げつけられるのかと怯えていた。

「それは、なんというか……驚かせてしまったかしら？」

「……はい？」

その言い方に違和感を抱いたしほは間抜けな声を漏らす。

紬は少し困ったような、それでいてどこか悲しそうな笑顔で言葉を続ける。

「あの子もしほさんの事はきつと好きなのよ？でも恋人以上の、夫婦という関係にあの子は怖がったの」

しほの言葉から何を確信したのか、紬はどこかハッキリと断定するように言葉を口にしていく。

「怖がる？」

「そう……例えばの話で、あの子が子供を成すとしてその子供があの子と同じように体の弱い子になる可能性はどの位あると思うかしら？」

「そ、れは……」

咄嗟に答えることはできない。何故ならしほは医者ではないし、いくら介護関係の知識がある程度一般人と比べて多いとは言え、専門的な遺伝については知るはずもない。

そのしほをやはり悲しそうな笑顔で見る紬は話す。

「それにあのこと一緒になることで、きつとその女性は色々諦めることになる。それだけ自分の身体が……自分という存在が重荷になることをあの子はキチンと理解しているのよ」

「……まさか」

そこまで話した紬の言葉にしほはあることを察する。それに頷いてから、彼女は口を開く。

「それをあの子はあの時からずっと気にして、酷い時はそれ関係の夢も見ていたようよ。よく相談もされたわ」

「そ、んな」

しほは絶句する。

普段、しほは彼と接するときそんな素振りを全く感じていなかった。だが、だからこそしほはプロポーズの言葉を彼に送ったのだ。

そして今、しほは後悔した。——してしまった。彼が色々な事

を考え、気にしていたと言うのに、自分は何処まで自分本位であったのかと。

沈んでいく気持ちを表すように、しほは自然と俯いてしまう。

いつの間にか運ばれていた、注文していたコーヒ―はすっかり冷めてしまっていた。

「しほちゃん」

数分続いた沈黙を破ったのは紬の呼びかけるような言葉であった。

「あの子がその事を気にし始めたのは、貴女と出会ってからなのよ」

「……え？」

その言葉を理解するのに数秒を使った。

「あの子が自分の部屋から外の世界に目を向けるようになったキツカケは、間違いなくあなたなのよ。そして、今日まであの子が前向きに生きてこられたのも貴女のおかげ」

「そんな、私は」

「……………あの子に対する後ろめたさなら私も持っているのよ？」

その突然のカミングアウトにしほは目を丸くする。

彼女が知っている範囲で、紬という女性は母親としては理想以上に立派な人だとしほは思っていたのだ。そんな彼女の反応が面白かったのか、少しだけ表情を柔らかくして彼女はその心境を吐露していく。

「私も幼い頃……というよりも結婚するまでは少しだけ病弱だった。

そして、結婚して、あの子を産んで、そして医者にあの子の身体の事を聞いたときはみつともなく泣いて、旦那に縋ったわ」

「……後悔はしなかったのですか？」

「それはないわね」

即答かつ断言。再びしほは目を丸くする。

「それ以上に愛しくなったから。自分の愛情を全部あげるようにあの子の世話をして、私も少しずつ元気になったし、後悔もない。悲しみよりも今その時生きていてくれるあの子に感謝しているくらい」

その言葉がしほの中にすんと落ちる。

先程までのどこか悲しい笑顔ではなく、誇るように、照れるように、

満たされているような笑顔に同性ということを忘れ、しほは見惚れる。

その溢れ出す母性というものに、しほは憧れに似た感情を抱いた。

「しほちゃん、あの子は変なところで遠慮がちだからしつかりと自分の想いをぶつけてあげて。きっと勘違いしているはずだから」

「？」

「だって、あの子は『誰にも迷惑をかけずに生きられる生き方』があると思いをしているはずだから」

「あ」

「あの子のこと、お願いね？」

そう言うと、憑き物の落ちたような表情を浮かべたしほは「失礼します」と一礼してから喫茶店をあとにする。

それを微笑ましく想いながら、紬はちょうど放送で流れた呼び出しに従い、彼の主治医のいる部屋に向かうのであった。

しほは早足である一室の前に向かう。

彼の定位置に近い病室。今回も検査が始まる前に、彼の主治医がこの部屋を使用することを言っていたために迷うことなくその場所に到着する。

その扉の前で、しほは少し乱れた呼吸を整える為に二度三度と深呼吸。

そして、整うと同時に扉をノックする。

「どうぞ」

意外なことに部屋の中からは彼の声。どうやら検査中か若しくは検査後に目を覚ましていたらしい。

「失礼します」

しほは断りを入れて入室する。

その時、しほはベッドで半身を起こしている彼の身体がビクリと震えたのが見えた。その事に思うことがないといえば嘘になる。寧ろ、少し傷ついたらいいだが、これぐらいでへこたれる訳にはいかない。喝を入れ、しほはベッドの横に立つ。

「しほ、さん？」

「紬さんから聞きました」

「っ」

先ほどよりも大きく彼の身体が揺れる。そしてもうほとんど見えていない目がしほの方に向けられる。

その彼の表情は筆舌に尽くしがたいものであった。だが、一つだけ言えるのであれば、間違いなく今の彼は怯えていた。

「え？」

「貴方は本当に優しく、馬鹿ですね」

だから、ふわりと自分を包むような暖かさと感触、そして女性特有の甘い香りが彼の思考を停止させる。

「怖いのはあなただけではいいのですよ？」

しほはうるさい程に自己主張してくる心臓の鼓動を彼にも聞こえるように、自身の胸で受け止めるように彼の頭を抱き込む。

「貴方がいなくなってしまうのが怖い。自分が選ばれないかもしれないのが怖い。貴方と一緒に入れなくなるのが怖い。でもそれ以上に、自分の気持ちを知ってもらえないのが怖い」

今、自分の顔は酷く赤いだろうなどのぼせ気味の頭がそう思う。

「一人にならないで欲しい。貴方のために背負う物があるのであれば、それを背負うのは私でないと嫌なのです。だから貴方の本心を聞かせてください」

そう言って少しだけ腕の力を緩めて、自分の胸に顔を埋める体勢の彼を見る。そこには、十数分前の彼女と同じく、俯き気味の彼の後頭部が見えた。

「……………僕は」

「はい」

「僕は、きつと貴方よりも先に死んでしまう」

「その時までずっと傍にいます。その瞬間まできつと私は幸せです」

「僕は、子供に重荷を背負わせてしまうかもしれない」

「一緒に背負いましょう。その為に私は貴方といたいのです」

「僕は、貴方に迷惑をかけてしまう」

「私も貴方を困らせることをきつとしてしまいます。同じ人間ですから」

「僕は……………」

「はい」

淀みなく喋っていた彼の言葉がつまり、少しだけ震え始める。

「僕は……………」

胸のあたりに湿り気を感じる。それが何故か確かめるまでもない。彼は自分で顔を上げてしほに向き合う。その量の瞳からは大粒の涙が幾重も流れていたのだから。

「ぼ、くは……………貴女が、好きです……………しほさん」

「私も愛しています」

子供のように顔をクシヤクシヤにして彼は泣き始める。

それは確かに歓喜の涙であった。だが、それは彼の背負う物が減ったというわけではない。寧ろ背負う物は増えただろう。

だが、寄り添いあう人は重荷以上に、確かな支えになる。それをお互いの体温と感触で確かめ合う二人であった。

家族

日本家屋の縁側にはどこか静謐感がある。

その静かでありながら、少なくとも音の溢れる場所に彼は座っていた。

小柄の体にしては大きな座椅子に座り、この日本家屋に住まうようになってから度々着るようになった着流しが崩れないように姿勢を正しながら、彼はそこから聞こえる様々な音に耳を傾けていた。

夏であり、まだ日中のため絶え間なく続くセミの合唱。そして時折吹く風が、風鈴の澄んだ音を鳴らし、青々とした木々の葉を擦れさせる。

その音の波に身を任せているだけで、彼は幼い頃に確かに見た風景を思い出す。

その風景をもう見ることができないのは寂しい。それは偽れない彼の本心である。

だが、それを超える幸福の形を、今の彼は持っていた。

「お父さーんー!」

「お父様」

芝を踏む二人分の足音。それを追うようにして聞こえてくる幼い女の子の声。

その元気でできていると勘違いしそうなほどの活力に溢れた音に彼の頬は自然と緩んだ。

「おかえり、まほ、みほ」

それは彼が恐れを乗り越えた先に掴んだ未来であった。

彼と西住しほと婚約騒動は本人たちが思うよりも大きな騒ぎとなった。

その発端となったのは、この二人の結婚を認めない反対派が少ない人数存在したことだ。

とは言っても、彼に懸想していた女性陣が多くその結婚に反対した

——というわけではない。寧ろ、そう言った人達は、彼が自分で相手を選び、そしてその想いが成就するかもしれないと考えその結婚を応援したぐらいだ。

では、誰が反対したのか？

それは西住流関係者たちであつた。

彼らは、良くも悪くも西住しほという女性に大きな期待を寄せていた。それは次代に続く後継者に関しても、だ。

つまり、彼らの反対の言い分はこうだ。『正々堂々と力強さを示す西住流の夫として、彼はふさわしくない。病弱な彼では西住家の未来すら危ういものになってしまう』ということらしい。

この意見に支持をしたのは、西住しほと婚姻関係を築くことで、西住家との関わりを持つとうとした戦車道関係の家などである。

その決して小さくない規模の一派に対し、しほと彼の両親を始めとした賛成派はその意見に対し真つ向から立ち向かうこととなった。

こじれにこじれた論争の中、とうとう堪忍袋の緒が切れたしほは宣言する。

「家を気にして私の未来を決めたいのであれば、私を戦車道で倒してから偉そうなことを言いなさい！」

これを聞き、賛成派と反対派の代表チームが戦車道の試合を行い、勝った方の意見を採用する流れとなる。

この時、しほは既に次期家元としての実力をはつきりと示していた。その為、当初反対派はこの試合に乗り気ではなかったが、実力、権力ともに有力な家の殆どが反対派に所属していることに気づくと手のひらを返すようにしてその試合を承諾した。

彼が一般家庭の人間であり、親族に戦車道に関係する人間がいなかったことも要因の一つである。

だから、彼らが把握できていなかったのは、彼の人脈の異常さとその人柄の良さからくる人徳の大ききさだ。

試合当日、反対派が用意した西住家の連合軍と呼べるような戦車三十両に対し、賛成派は西住しほを筆頭に“彼女が苦戦した”戦車道チームからの選抜十五両で対峙する。

賛成派のしほ以外の車両に乗る女性たちはいずれも彼に想いを寄せていた人たちであり、それ以上に彼の幸せを願っていたのだ。

そして、試合はあっけなく終わる。

しほたち賛成派の蹂躪による圧勝という形で。

試合会場で、ほとんど景品扱いで主治医まで控えてもらっている状態の彼は、その時初めて『女性は強い生き物なんだ』と本能的に悟った瞬間であった。

「貴方をもう離しません」

試合後すぐに彼の元に戦車で駆けつけたしほの第一声である。そう宣言したあと、大衆の面前であるにも関わらず、しほは彼の唇を奪う。

お互いにファーストキスであった。

そんな、なんやかんやを思い出しながら、彼は夏にしては涼しいその縁側で自身の二人の娘の髪を梳くようにしてなでていた。

二人は今、座っている彼の膝に左右から凭れるようにして眠っていた。

自分では考えられないほどに活発的な姉妹に、不意に感情がこみ上げそうになる。

「健やかに育ってくれてありがとう」

二人には聞こえていないだろうが、その言葉は感謝であり、願いであった。

「貴方」

パタパタと木の廊下を踏む音が響いてくる。先ほどと同じように二人分。

その聞きなれた音を聞きながら、二人を起こさないように音のする方に首を向けようとするが、思ったように動かせない身体に苦笑を漏らす彼であった。

「しほさん、菊代さん」

「姿が見えないと思えばやっぱりここに」

どこかため息を吐きそうなしほの声と言葉から、どうやら二人はま

ほとみほを探していたらしい。

どうかしたのかを聞こうとする前に、先に女中である菊代が説明し始める。

「旦那様、お嬢様たちは外に出ていたらしく泥で汚れているのですよ」
そう言われると、二人の汗の匂いや戦車に乗ったときにつく油の匂いに加えて、土の匂いがいつもよりも強く香ってきていた。

「お二人を着替えさせてお布団の方に移動させますね」

「いつもありがとうございます、菊代さん」

そう言われて、笑顔と会釈を返すと彼女は、器用に二人を抱っこしてまたパタパタと去っていく。すると、先ほどよりも自分に近づいているしほの気配に彼は気付いた。

「しほさん?」

「貴方も着替えますよ。二人の泥が着物についてしまっていますから」

言うやいなや、しほは彼の手を取る。促されるまま、彼は立ち上がる。

その時、手のひら越しに感じる彼女の体温によって、何故か彼の気持ちが溢れそうになる。

「しほ」

「!」

二人きりの時だけの呼び方。それをしたことにより、彼女が驚いたことが繋いだ手から感じる事ができた。

「今、僕は幸せです。しほはどう?」

「聞くまでもありませんよ」

そういう彼女の表情を触ってなくてもわかるくらいに、彼は彼女を理解し、そしてそう思える程の幸福を彼は感じていた。

始まり

久方ぶりに彼は体調を崩していた。

その日は朝から分厚い雲から少なくない量の雨が降っており、絶え間無い強い雨音が室内であつても響いてくる。

そんな雨の中、高校生になつた二人の娘が戦車道の試合を行つていくというのも、ある意味で彼の心労となつていたのかもしれない。

「……大丈夫……大丈夫」

願うように、言い聞かせるように、彼はそう口にする。

西住家に置いて、彼の私室となつている和室で、彼は床につきながらも彼女たちのことを想つていた。

優れない体調は、彼の頭を茹だらせ、意識もボンヤリとさせる。高くないが低くもない体温が華奢な肉体から、もともと少ない体力をさらに削り取っていく。

生涯において、幾度も経験してきたその感覚に慣れることはないのだろうと、彼はどこか諦めにも似たことを頭のどこかで考えていた。

「失礼します」

そんな中、一声かけてから襖を開けて入つて来たのは、女中である菊代であつた。

「お水とお食事をお持ちしました」

そう言つてから、彼の横たわる布団の傍にそれが乗つたお盆を置き、控えるように腰を下げる彼女は一緒に持つてきた御絞りで彼の顔の汗を拭い始める。

流石に体全てを拭くには、御絞りでは小さすぎるため顔と首周りだけとなる。だが、それでも先程まで発熱による汗による不快感が酷かつたため、一部とは言えそれがなくなつた彼は自然と表情筋を緩めていた。

「お食事を終えてから、体の方を拭きますね」

熱でぼんやりとする頭が、ゆつくりとその言葉を理解する。そして、気が付けば彼は菊代に支えられながらも敷布団と体の間に差し込

むようにして置かれた座椅子に、上半身を預けるようにして座っていた。

「人肌に冷ましています。口を開けてください」

彼から見て右手側に座る彼女は、自身の膝に彼の手を置くとお盆の上のお椀とスプーンに手を伸ばす。

そのお椀の中には、様々な食材を煮込むことで多くの栄養素を抽出した出汁から作られたお粥——の上積みである重湯が注がれていた。

調子の良い時でもあまり固形物を食べるのが得意ではない彼女にとって、伏せている時に口にするのは大体これなのだ。

「——っん」

スプーンによつて口に運ばれた糊状の液体は、生憎と発熱によつて薄くなっている味覚ではあまり味も感じる事ができなかったが、確かに身体にじんわりと広がっていく何かを伝えてくる。

口に含んだ重湯を飲み終わると、次の一口を催促するために彼は右手の指を上下に動かし、指先で菊代の膝を少しだけ叩く。そして、先ほどと同じように菊代は重湯をスプーンで彼の口に運ぶ。

もう幾度も行ってきたそのやりとりは三十分ほどで終わりを迎える。

元々食事量の少ない彼女にとっては、お椀一杯でも空腹を満たすには十分なのだ。

「奥様達はもうこちらに帰ってきていると連絡がありました。もう二、三時間もすれば帰ってきますよ」

そう言われたのは、汗びたしになった寝巻きである着流しと布団を交換し、彼の体を吹き終わってからであった。

不快感が文字通り拭われ、そしてある程度の満腹感により再び眠気を感じていた彼女にとって、それは子守唄のような安心感を覚えさせる。そして先ほどよりも、穏やかな寝息を彼が立て始めるのに、時間を費やすことはほとんどなかった。

ふと目が覚めた。

うるさい程に地面を叩いていた雨音は弱くなり、今は静けさを際立たせるアクセント程度になっている。

「……っ」

長年の病床生活で身に付いた感覚で、熱が引いていることを確信した彼は、ふわふわしているがどこか重い体を起こす。

すると、昼間であれば遠くで聞こえる足音が聞こえないことから、今が夜であることを察した彼は、再び寝汗で濡れた体を拭くのは明日になるのかと考える。

「——え？」

そこまで考えて、再び寝転がろうとする前に、その声が彼の耳に届いた。

布団から這い出ると、そのまま四つん這いの状態で部屋と縁側をしきる障子に近付き手を掛ける。

ゆっくりと開かれていく障子。その隙間が大きくなればなる程その声は大きくなって彼の耳朶を打つ。病み上がりで、動かしづらい身体にやきもきしながらも彼は乾いている喉を震わせ、声をかけた。

「みほ？」

「っ、お、とう、さ……ん？」

先程まで聞こえていた声——しやくり上げながら、何かを抑えるようにしながらも漏れてしまう泣き声の主である西住みほがそこにはいた。

「起きて、だい、じょうぶ、なの？」

湿った声が途切れ途切れに耳に入ってくる。

逆に問い返したいくらいに弱々しいその声に、彼は反射的にそつとみほの頬に手を伸ばしていた。

「どうしたの？」

自然と声が零れる。

みほはその言葉と、泣いたおかげで熱っぽかった頬に添えられた冷たい父親の手の感触を意識させられる。

その感触は、ぐちゃぐちゃになっていた心に入り込んでくるように、凝り固まった気持ち解すようで、表情をくしゃくしゃにしてし

まうには十分なものであった。

「わかんない……………私には、なにがよかったかなんて、わからないよう」

それだけを口にして、みほは父親に縋るように抱きついていった。

いつの間にか、自身よりも大きくなっている我が子に抱きつかれ、体重を支えることもできずに押し倒されてしまう彼。

それを内心で「情けないなあ、男親なのに」とか思いつつ、自分の身体に顔を埋める娘の頭を撫でてやることしかできずにいた。

「それで一体、なにがあつたのかな？」

一頻り泣いたあと、深夜ということから部屋の灯りは点けずに、いつの間にか雨も止み、雲から顔を出していた月の光のある縁側でいつもの座椅子に座つてから、彼はみほに声をかけた。

「……………お父さん、勝つ以上に大切なことって無いのかな？」

幼い頃のように、座つた彼の膝に頭を寄せながら横になつていたみほはそう訪ねてから説明を始めた。

要点を纏めるところだ。

本日——と言つても時間帯的には昨日のことになるが、みほとまほの二人は全国戦車道大会の高校生大会に出ていた。しかもその試合は決勝戦であり、二人の所属する黒森峰学園の十連覇がかかった試合でもあつた。

試合はこれまでのトーナメントの試合と同じで、二人は手堅く、そして力強く試合を進めていた。

しかし、試合の途中で事故が起きる。

朝からひどく降り続ける雨により地盤がゆるみ、みほが率いていた小隊の戦車の内の一両が川に転落したのだ。

川は雨により勢いも水かさも普通の川とは思えない程であつたらしく、戦車ですら沈んでしまうものであつた。

そしてフラッグ車の車長をしていたみほはその時一も二もなく川に飛び込み、戦車に乗っていたチームメイトを救出する。

ここまでであれば、西住みほは人として正しいことをしたと言える。だが、戦車道における西住流として、チームのフラッグ車を預か

る車長として、それが正しい行動であったかは、別なのである。

長時間、車長を欠いたフラッグ車は敵車両の良いたつてしまいい、その結果敵の攻撃によりフラッグ車は大破認定。白い旗が掲げられ、黒森峰の敗北が決定した瞬間であった。

「――試合の後にチームの皆もお母さんも、私が間違っていたって、あの時試合を優先すべきだったって………私は間違ったの？」
普段であれば絶対にしない、告げ口のような言葉をみほは言う。それだけ、彼女は追い詰められていた。

「………みほ、こちらを向いて」

それまで静かに聞いていた彼は、髪を梳くようにして頭を撫でていた手を止め、横になっていたみほを座らせる。

そして、かつて自身の伴侶である女性にしたように、そうすることが自然なようにみほの頭を彼は自身の胸に抱くように導いてやった。「聞こえる？感じる？きつと、僕のこの音は普通の人よりも小さいし、弱々しいと思う」

みほは彼の胸の中でその音を確かに聞いていた。一定のリズムで刻まれるその躍動を。確かに感じていた。そこから感じる力強いと言えないが、自己主張を続ける振動を。

「みほは今日、確かにこれを救ったんだよ？それは僕にはきつとできないことだ」

そのことを「仕方ない」という言葉で片付けてしまうのは簡単だ。だが、それでも何か人の役に立ちたいと思い、始めた作曲という彼の仕事。それは確かに誰かの心を助けることはあったかもしれない。だが、彼が直接的、物理的に誰かを危険から救う事は決してできないのだ。そんなことをすれば命を落とすのは彼の方なのだから。

しかし、その彼ができないことを腕の中にいる少女は成し遂げた。「みほ、間違うことは悪いことじゃない。それに間違つたとしてもそれ以上に正しいことをしたと自分で胸を張ることができるのであれば、それは誇るべきことだ」

「でも………」

「………黒森峰で戦車道続けるのは怖いか」

口籠った娘の反応から彼は察する。

単純に考えて、今回の問題は人としての道徳的な正しさを取るか、選手と西住流の正しさを取るかの問題なのだ。

そして、黒森峰は良くも悪くも西住流に染まりきった戦車道をする学校だ。言葉ではつきりと口にしたわけではないが、今回のみほの行動は高校生チームという一つのコミュニティの方針を曲げるものであった。その中で、これまで通り戦車道が続けていくとなると、みほはそのチームの方針を正面から否定するか、若しくは自分が間違ったことを受け入れなければならぬ。

(それはひどく残酷だな)

彼は想像する。

黒森峰のチームメイトの前で、人を助けたことを謝る娘の姿を。そして、それを助けたチームメイトの前で行い、お互いに傷つけ合ってしまう女の子達の心を。

腕の中で、怯える我が子は父親からの質問にゆっくりと頷いた。

「……………」

雨上がりから間もないためか、虫の声もない静かすぎる夜。

耳が痛くなりそうなその沈黙の中で、彼はみほの頭を開放してやる。

そして、何を考え、どういう結論に至ったのかは定かではないが、彼はこう切り出した。

「みほ……………」一緒に家出しよう」

新生活

人間は新しい事柄、環境、生活といった様々な経験をできると知った時、非常に何かを期待する。

それは好奇心という言葉で片付けることはできる。しかし、それに命をかけて挑まなければならぬのであれば、それはなんとさえいいのであろうか？

「海の匂い……これが磯の香りかな？」

そんな命をかけた『四十代の新生活』を送り始めた彼は、大洗学園の所有する学園艦の淵に近い公園で、凹凸のある紙面を触り読むことでしか知らなかった匂いを感じていた。

「先生、あまり長居してはお身体に触りますよ？」

「……では、帰りましょうか。いつもありがとうございます、タカシくん」

屋外ということでは車椅子に乗っている彼の後ろには、車椅子の取手を握る青年がいた。

タカシと呼ばれた青年は昨年まで高校生だったのだが、卒業すると大学には進学せず車椅子に座る彼の所属する事務所に就職をしてきた。何でも在学中に聞いていた彼の作曲した曲に影響を受け、こちらの道に興味を示したのだとか。

そして、在学中にしっかりとその分野についての勉強をし、デスクワークこそまだ苦手ではあるが音楽関係の機械の設置や操作は完璧にこなせるまでになる。

だが、音楽関係とはいえ芸能活動というある意味で博打に近い世界に足を踏み入れるため、タカシの親は最低でも高校を卒業しある程度の資格を取っておくことを条件にした。

そして、高校で音楽関係以外の様々な分野に手を出し、資格を取りつつタカシは親の条件を十分に満たし、両親から笑顔でこの業界に送り出された。

ならば何故、そんなタカシが彼と一緒に大洗の学園艦にいるのかと

いえば、彼がみほに言い出した『家出』という提案に理由がある。
『黒森峰……西住流に居ることが辛いのであれば、一旦ここから離れてみよう』

というのが、あの夜に行われた親から子への会話である。

そこからは彼の無駄に広い人脈を駆使し、あつという間にみほの大洗への転入が決まる。

しかし、ここで問題が一つ。彼は娘であるみほと一緒に大洗に行く気満々であった。それに待ったをかけた者がいた。それは今回のみほの転校先の斡旋などを行ってくれた以前までの彼のマネージャーである。

「学園艦は只でさえ陸との交通が不便ですしそれは仕事の上でも不便になります。それに厳しいことを言いますが、先生は環境の変化という負担に耐えられるのですか？」

遇の音も出ない正論であった。

しかし、娘に提案し、やつと親らしいことをしてあげられると考えていた彼が折れることはなかった。

「介護をしてくださる方を探します。それに一昔前ならともかく、今はメールとかパソコンを利用すれば曲の譜面も送れますよね？」

結局、彼の意見を聞き入れ、会社は承諾。代わりに会社の人間を一人同行させ共同生活をさせることで話が落ち着く。

そして、彼の介護兼マネージャー役として、その時には既に入社していたタカシに白羽の矢がたったのであった。

決め手は、学生時代にとった資格の中に栄養士や介護士のもが含まれていた事と、入社してあまり時間が経っていなかったためフットワークが軽いのが彼ぐらいしかなかったことである。そして、元々彼のファンでもあったタカシは、この話を一も二もなく承諾。新人の中では異例の速さで仕事を覚え、事務所側もタカシの能力を認めた上で了承であった。

そして、そういったあれこれや、細かい手続きのなんやかんやを超えて、西住親子とタカシの三人は大洗学園の学園艦での新生活を始めたのであった。

ちなみに一番の難題は、どうやってしほとまほの二人にバレずに行方を暗ませるかであったりする。それについてはある女中を今回の計画の協力に引き入れることで解決したのだが、そこに漕ぎ着けるまではそれなりに苦労したのは完全に余談だ。

閑話休題

彼がタカシを引き連れて学園艦の上を散歩しているのは、純粹に来たことのない土地に興味を持ったが故であった。

こういった外出は彼の体のことを考えるとあまりしないほうがいいのだが、作曲を行う上でのインスピレーションが生まれるきっかけにもなるので、時間がある程度制限した上で散歩に出かけているのである。

「……………」
押されている車椅子の振動に合わせ、指がリズムをとっていく。

学園館という事で、街の中には割合的に多くの桜が植えられている。年度の始めということで、桜は満開を少し超え葉桜になり始めている。

なので、それに伴い舞い散る桜の花びらが二人の歩く道にも降り注がれていく。

それに合わせるかのように、椅子に座る彼はハミングを口遊む。

「……………うんっ…」
「えっ…」

道ですれ違っていく様々な人が、静かでありながらもよく通るその音に立ち止まる。そして振り返ると、車椅子に乗った彼が歌っている事に驚きの声を漏らしていく。

その時、その瞬間、彼が感じたモノが音となって生まれる。

詩のない歌。

その作業というにはどこか不思議で神秘的な光景は、その場にいた人々を惹きつけた。

「……………」

歌が一区切りしたのか、彼はその口を閉じていた。その代わり、今度は不思議そうな表情で、小首を傾げながらある一点に顔を向けてい

た。

「タカシさん、向こうには何が——タカシさん？」

「え、あ、はい……え？」

いつの間にか止まっていた足と車椅子の車輪。それは、彼が歌を生み出す瞬間を初めて目の当たりにしたタカシが呆然としていたが故であった。

「？えっと、向こうには何があるのですか？小さなモーターが回転している音が聞こえるのですけど」

タカシの気の抜けた返事を不思議に思いつつ、彼は再び問いかけた。

その声にハツとしたタカシは、顔を左右に降ることで意識を切り替える。そして、彼が向いている方に目を向けてから口を開いた。

「えっと、理容室ですね。きっと、先生が聞いた音は床屋の目印になっている看板が回っている音ですね」

「看板が回る？」

幼い頃から箱入り生活をしてきた彼にとって、見たことも想像もしたことのない光景に再び首をかしげる。その仕草に「本当にこの人四十代か？」とか思いながらも、タカシは説明を続けた。

「理容室の看板はサインポールって言って、一本の棒に白、赤、青の三色の縞模様にして、それを回転させることで店を開いていることを示すようになってるんです」

説明したあとに、盲目の人間に対して無神経な発言かと一瞬後悔するタカシであったが、当の本人は興味津々な子供のような表情で、その音を聞いていた。

「ん？」

その様子を覗いた時に気付く。車椅子に座る彼の髪が意外と伸びている事に。

どうやら盲目であることから、あまり他人に目を見せないようにという本人の希望で、前髪で目が隠れるようにしていたため他の部分が伸びている事に、本人含め周りの人間も気付かなかっただけらしい。

「先生、御髪が結構伸びているので休憩も兼ねて理容室に寄りません

か？」

「……理容室って予約が必要じゃ？」

「まあ、理容室といっても床屋ですから予約は必要ないですよ。待っているお客もいないようすし」

変なところで知識が偏っている事に苦笑いするタカシ。彼の中の常識は基本的に母親やしほ、そして娘二人の常識と一致している。その為、彼の中では理容室と美容院はイコールで結ばれているようである。

「じゃあ、せつかくですし」

そう言つて、彼は再び車椅子を押されながら理容室『秋山理髪店』へと入っていくのであった。

学園生活

『もしもし、大洗学園の二年A組の担任をしている春原と申しますが、西住さんのお宅でよろしいでしょうか？実は今日、西住みほさんが授業中に体調を崩して保健室の方へ行きまして、転校してきたばかりで体調が優れないこともあると思います連絡させていただきました。こちらでも彼女を気にかけるようにしますので、ご家族の方もそういったことがあった程度でよろしいので気にかけてあげて頂ければと思います』

散歩から戻ってくるとそんな電話を彼は貰う。

ここまで気にかけてくれる教員が我が子の担任になったことを喜ぶべきが、それともその内容に驚いて心配するべきか、咄嗟の判断が彼にはできなかった。

一方その頃、当人であるみほは新しくできた二人の友人、武部沙織と五十鈴華と一緒に放課後の寄り道兼買い食いをしていたりした。

「じゃあ、みほってお父さんと一緒に大洗に越してきたの？」

「うん、そう。正確には、お父さんとお手伝いの人と三人だけど」

アイス店、74アイスクリームという店で、それぞれ好みのアイスをばくつきながら、自己紹介に近い会話をしながら、自然と三人の口調から堅い言葉は取れていく。

「お父様はこちらでお仕事をなされるのですか？」

「一応、自宅でもできるお仕事だから。それにこっちに来る前も家で仕事していたし」

「では、あまり自宅の方にお邪魔するのはよろしくくないですね」

「そ、そんなことないよ！私生活の部屋と仕事部屋は同じアパートでも違う部屋になっているから、全然大丈夫だよ」

そのみほの発言に、事前に保健室で聞いていたみほの戦車道の家元はそんなにお金があるのかと、若干いやらしい考えが二人の脳裏を過ぎった。

実際のところ、今回の引越しなどにかかった費用は、基本的に父親

である彼のポケットマネーから来ていた。治療費と仕事に必要な楽器や筆記用具以外、特にお金を使うことが無い彼は、作曲関係の著作権などの給金をそのまま自己資産として保存しているので、言い方はあれであるが、彼がお金に困ることはほとんどないのである。

しかも、西住流の方に資産の一部を寄付しているにも関わらず、潤沢な資金を持っている彼は現時点の西住家において一番の稼ぎがしらでもあつたりするのだから笑えない。

そういつた事情を知らずにお喋りを続けていたみほは、そろそろ帰らないとまずい時間になつている事に気付く。

「えつと……………あ」

その事を切り出そうとすると、ちょうど店内のBGMが変わつた。

「ん？この曲最近よく聞くけど何の歌だっけ？」

「確か、何かの映画の曲だったかと…………」

「そうだっけ？映画の方は知らないけど、この曲は何か耳に残るから……………みほ？」

そこまで話して沙織は気付く、机を指先で叩きながらリズムをとっているみほに。

瞼を閉じ、耳に入ってくる音以外の情報をカットする。

「」

イントロからAメロ、Bメロと繋ぎ、サビに入っていく。

その中でみほは指先を弾くようにして机を叩き、その音が曲の印象を少しだけ変える。

いつの間にか、その小さな演奏は店の店員、お客、老若男女問わずに耳目を集めていた。

BGMのその曲は編集されたものだったのか、一度目のサビが終わる間奏の半ばでフェードアウトする。

「ふう……………えう？」

曲が終わると、みほはほつと一息。それと同時に目を開けると、果然とこつちを見ている一同にびっくりすることになった。

「お上手です、みほさん」

嘩然とする皆の中で、唯一芸術面の感動に耐性のあつた華がそう感

想を漏らす。それに続きはやし立てるように沙織も口を開く。

「すごいよ、みほ！男の子に聞かせれば絶対モテるよ！」

「モテたことあるのですか？」

「え、あう、これは」

その二人の賛辞から、みほは顔を赤くしそうになる。しかし、追撃するように周りのお客さんたちが暖かい笑顔で拍手を送ってしまい、結局のところ、彼女は顔を真っ赤に染めて足早に店をあとにするのであった。

「こつちに来てから初めて、やっちゃった……」

以前から人前では注意されていた癬を反射的に披露してしまったみほは、軽い自己嫌悪をしながら、新居になっている部屋の鍵を朝と同じように差し込み、回した。

「ただいま〜」

「みほ？大丈夫？」

リビングに入ると父親である彼が、部屋出入り口近くの椅子に座っていた。

彼はみほが入ってくるやいなや、ペタペタとみほの顔を両手で触り始める。その事に本日何度目かのびつくりをしながらもみほはされるがままになっていた。

「お、お父さん？どうしたの？」

気が済んだのか、手を動かすことはなくなったが、一向に顔から手を離そうとしない父を不思議に思いみほは尋ねる。

幾分冷静になったみほは自分は大丈夫という意味合いも込めて、父の手の甲に重ねるように自分の手を自身の顔に近づけた。

そこまでして、自分よりも目線の低い父親の髪型が朝よりも短くなっており、そして短くなったことでよく見えるようになった目元に薄らと光るものがあることにも気付く。

「お父さん？」

「……学校から連絡があって、みほが保健室に行っちゃって」

そこまで言われて、みほは先ほどよりも深い自己嫌悪に陥る。

自分にとっては仮病にも近い授業のボイコットが、父親にとっては酷い心労になってしまいここまで取り乱す原因になっていたのだから。

「お父さん、大丈夫。私は元気だから。少し動揺することがあって、授業に集中できてなくて、それを心配してくれた先生が念のためにつて」

言い訳とも安心させるための説明にも聞こえる彼女の言葉は、少しぐはぐであったがその声と反応から娘の安否がはつきりとした彼が落ち着くのに早々時間は必要としなかった。

「心配かけちゃったな」

夕食を終え、毎食後に飲んでいる薬湯を飲み終えた父が就寝するのを確認してから、みほは浴室でそんな事を呟く。

今日は濃い一日を過ごしたと考えながら、みほはその一日を振り返る。

お昼休みに二人の新しい友達と昼食をとったと思えば、生徒会の人たちに戦車道をするように言われる。

そして、茫然自失のところを新しい友達と三人で、保健室で授業をボイコット。

さらにその後には、選択必修科目の説明で戦車道に惹かれる友達と話しながら、帰り道の途中で寄り道と買い食いをするという女子高生らしいやんちゃ。

それらは転校する前では——西住という家や黒森峰では味わうことのできない、また違った日常。それを心地よく、楽しく感じているみほは自然と頬が緩むのを自覚した。

「……あ、選択必修決めないと」

もつとも、先送りになっていた問題を思い出すのも同時ではあったが。

一方その頃、とある理髪店ではこんな会話がされていた。

「優華里、今日すごい人が家に来たわよ」

「すごい人……ですか？」

「そうこの人」

「色紙にサイン……………つて、これって作曲で有名な？」

「そうなの。名前は知っていたけど顔は知らなかったからもうびっくりしたわ」

「でも、どうしてそんな人が学園艦に？」

「なんでも、大洗に娘さんが入学しているらしいわよ？」

「うちに？」

他方で、とある家元ではこんな会話がなされていた。

「母様、父様を追いますので資金を都合してください」

「……………いきなり入ってきて何を言っているのかしら？」

「父様が心配です」

「気持ちは分かるけれど少し落ち着きなさい、まほ」

「私は冷静です、なので資金を」

「……………育て方を間違えたかしら？」

「父様がない、いない、いない、いない、いない、いない

……………早く見つけないと」

「……………菊代、この娘を自室にぶち込んでおきなさい。あとで私も行きますから」

「奥様は何を？」

「……………私も自分が思っているよりは冷静ではないのよ、今」

(……………手が、震えている)

旧知

「お父さん、私——ここで戦車道する！」

学校の先生から連絡のあった翌日、朝はどこか落ち込んだ様子であった我が子が夕方に帰ってくると、今度は勇んだ様子でそんな事を言ってくる。

新生活とは言え、昔の幼い頃のような娘の行動に父親である彼は、新鮮味を感じすぎていることに少しだけ驚いていた。

「急にどうしたの？」

「え、あう、えっと、今日選択科目の書類提出があつて、それで友達と一緒に戦車道を選ぶことにしたの」

色々と端折った説明であつたが、その声音にはどこか決意したような意志を聴く者に感じさせた。

「……みほがそう決めたのなら、頑張つて。……あと口喧しいかもしれないけれど、こつちの部屋は防音じゃないからあまり大きな声は出さないようにね」

口元に一本立てた人差し指を持ってきて『しーっ』としながら、彼はそう言うのであつた。

彼ら西住家が借りた部屋はあるアパートの隣り合う二部屋だ。そして、片方には西住の表札を、もう片方には彼の所属する事務所の名前が入っている。

それぞれ2LDKとなっており、西住の表札の方の個室は父と娘それぞれが使用し、事務所の方の個室は片方をタカシの私室と防音設備を整えた仕事部屋となっていた。

「……………え？それだけなの？」

「何が？」

あつさりとしたそのやり取りにみほは目をパチクリさせながら、思わず聞き返していた。

「何がって、私は戦車道から一旦離れるために大洗に来たのに、いきなり、その……………」

「離れるって……別に戦車道から離れるために大洗に来たわけじゃないよ」

みほの尻すぼみになる言葉に首を傾げながら、彼はそう答えた。その彼の返答にみほは冷水を浴びせられたような錯覚に陥る。

何故なら、彼の言葉はみほ自身が戦車道をしないことはありえないと言っているようなものなのだから。

「それって、私は戦車道を、やらなきゃダメって、こと？」

震える唇を何とか動かし、みほはそう問いかける。だが、彼から返ってきたのは再び首をひねる仕草とどこか戸惑うような言葉であつた。

「?どうしてそう思ったのかは知らないけれど、みほは西住流のやり方がよく解らなくなつたから転校してきた。そして、ここで自分のやりたい事を探している……そう思っていたのだけど、間違っている？」

「え、えつと、うん……間違っていない……と思う」

みほの返答に彼はホツとする。娘の考えを誤解していたわけではないと確認できたのだから。

「ならそれって、色々な選択肢の中でも、みほ自身がやりたいって思える程に戦車道を好きってことでしょう？」

「あ」

空気が漏れるような声が出た。

父親の言葉がどこかストーンと、体の中に落ち込んでくる錯覚を覚える。

「そっか……そっか、私は戦車道が大好きなんだ」

みほは思い出す。

勝つために試合をするのではなく、ただ自分の想うように動かすことのできる戦車が嬉しくて楽しかった幼い頃を。

姉と競うようにして、目の前にいる父親にはもちろんのこと、自分の事を叱りつけた母親にも褒めてもらえるよう、無邪気に練習をしていた事を。

「うん……うん！お父さん、私戦車道を友達と“やりたい”」

何故戦車に乗るのかと問われれば、今のみほはこう答える。

「きつと、それは楽しいから」

もう恐くないのかと問えばこう答える。

「後ろめたいことも、振り切れないこともまだまだあるよ。でも、それも含めて私が見つけたい戦車道だから」

その背伸びをしつつも、本当の意味で成長を見せた我が子の決意に彼はそれが当たり前前のように、いつもの声音で答える。

「うん、怪我のないように精一杯頑張つて、みほ」

という親子のやり取りを行ったのが、もう数日も前の話であった。

「何か……仲良し親子ですね」

「親バカな事に自覚はありますよ？」

ある建物の廊下をいつものようにタカシに車椅子を押ししてもらいながら、彼はそんな会話をしていた。

「それにしてもどうして今日は学園の方に？」

「知り合いから連絡をもらいましたから」

そうなのである。言葉通り、今現在二人がいるのは大洗女学園の廊下なのだ。

事の発端は、ある一本の電話からであった。

今現在の 大洗学園の学園長を務める人物は、学園がまだ戦車道を行っていた際に仕事の関係で彼とあっていたことがあった。

当時のあれやこれやを置いておくとして、平たく言えば彼と学園長はそれ以来親しい間柄なのだ。

そんな人物から電話があったのだ。『久しぶりに話さないか？』と。

たった数週間とは言え、既にこちらでの生活に慣れ始めていた彼はそれを承諾。そして今日、その約束に應えるために二人は学園の方に足を運んだのであった。

「学園長室に着きましたよ」

タカシの誘導により、一室の扉の前に到着する。

車椅子を方向転換させるのを感じながら、彼は普段着となっている着物の裾を正した。

「連絡を頂いた西住ですけど」

ノックの後に声を掛ける。

すると、数秒もせずとその内開きの扉は開いた。

「待っていましたよ」

お年を召したと言えば怒られそうな、老け始めた見た目の男性がそこにはいた。

「お久しぶりです、先生……今は学園長でしたっけ？」

「相変わらずどこか抜けたこと言うくせに、声だけでこっちの顔に自分の顔をまつすぐ向けて来ますね……そちらの若い人は？」

「仕事上の今のパートナーですよ」

「初めまして」

タカシは二人から向けられた視線を避けるように、軽く会釈を返していた。

「まあ、立ち話もあれですから中に入りなさい」

そして、案内されるままに二人はその部屋備え付けの机につく。もつとも、彼は車椅子のまま机の隣に停車させただけであつたが。

「そう言えば、こちらから伺おうと提案したのをわざわざ断つたのは、どうしたのですか？」

部屋の隅に置かれた茶道具一式と電気ポッド。それをいじりながら学園長はそんな問いかけを投げかけてきた。

「特にこれといって理由はないですよ」

「体調のことがあるの？」

どこか「分かっていますよ」という雰囲気を出す学園長に、彼は苦笑いを溢す。何故なら学園に来るのを強請つたのは彼なのだから。

「あー……えっと、知らない土地だから、感じたことのないインスピレーションがあるかもと思って」

「ははは……数日前に早速やらかしたらいいですね」

そう言いながら、学園長は三人分の湯呑を載せたお盆を運んでくる。湯気の出るものはタカシと自分のところに、残り一つの湯気が出ていない湯呑は彼の前に置かれる。

人肌の飲みやすい温度の飲み物を出してくるあたり、学園長と彼の

付き合いがそれなりに長いことをタカシは察することができた。

「やっぱり学園艦は噂も？」

「ああ、陸なんかよりも早い早い。しかもここにはそういった新しい情報——流行か、に飢えている女学生の巣窟ですから。いくら情報化社会が進んで、昔よりも艦外の情報が入ってこようとローカルな情報の方に飛びつくのは、今も昔も変わらないですよ」

しみじみとそう言ってく、感慨深げに頷いている二人。その姿と物言いからこの二人が、それなりの年齢を重ねた大人であることを嫌でも理解させられるタカシであった。

「そうそう、今日話す内容を先に言っておきましょう」

「？」

「うちで講演会しませんか？」

「……………はい？」

前置きからの本題を言われ、どこか間抜けな声を返すしか彼にはできなかつた。

「ここ、大洗学園に限らず、よその学園艦でもそうだが、いろんな分野を専門的に取り扱う授業がある。そして、校風によってそれは様々な特色を持ったものまであったりします。有名どころでアンツイオ高校の家庭科……まあ、平たく言えば食文化ですね」

「ああ」

学園長からの説明で、二人にはイタリアンな匂いと光景をそれぞれ連想していた。どっちがどっちかはお察しだが。

「まあ、そんな中でうちは食文化も校風もあまりパツとはしなくて、少し地味ですからね。他校よりもここが優れているとは、大きな声では言えないのですよ。そこで、業界では知名度の高い貴方に講演会の一つでもして貰おうかと思いましたがね」

要するに学園長が言うには、大洗の特に目立たない校風をどうにかしたいらしく。音楽関係で知名度の高い彼が音楽を教え、その学生がそこそこでも売れば他の学生にも良い刺激となり、大洗の特色になりうるのではないのかということだ。

少し言い方は乱暴だが、学園長は彼に才能という先行投資を大洗に

して欲しいと頼んでいるのだ。

「自分を嘗てくださるのではありませんけど、それは……」

「ああ、無理なら断ってくれていいので」

「へ？」

再び二人の口から間抜けな声が漏れた。

「学園艦では、あくまで学生が主体。下手に大人の企画するあれこれに振り回すのにも申し訳ないですからね」

「じゃあ、どうして」

「ふむ……どうしてと言われてもね。老婆心ながら、最近の子供は大きな夢を見なくなったがゆえにだからですか……」

そこからの学園長の顔は先ほどよりも一層老けて見えた。

「一番才能を伸ばしやすい時期に、下手に現実を見すぎてできそうにないからやらないとする子供が増えている……最近そう思うことが増えていましてね。自身の夢のために頑張る場所が学校だと考えているのですが、それを教師側が早く大人になれば、もっと現実を見ろと言う。それは少し寂しく思うのですよ」

どこかぼやくように言う学園長の言葉に、タカシは学生時代に夢に突っ走る自分を引き止めようとした後輩の事を思い出していた。

「まあ、駄目でもともと。新生活ということで体調管理も大変でしょう。身体が良くなつてからまた頼みますよ」

「……すみません」

「謝られても困りますよ。なんせ無茶を言ったのはこちらなのですから。どれ、消化しやすいお菓子で、さつまいものババロアを用意してあります」

そう言つて、学園長は席を立つと小さな冷蔵庫の方に向かった。

しみりとした空気であったが、久方ぶりの再会であると、それから二人はお互いの近況を話したりしながらその時間を過ごしていく。

そして、過去の話に花を咲かしている途中で、その音は聞こえてきた。

「——飛行機の音？ それにしては低い」

その眩くような言葉に学園長とタカシは首を傾げるが、学園長の方

は心当たりがあったのかすぐに得心顔になった。

「ああ、そう言えば……確か今日は戦車道の授業で指導役の方が来ますね。それでしよう」

「——それにしては音が近すぎるような」

そう呟いた次の瞬間、大きな音が空気を叩いた。

最初は何かが落ちる音。そしてそれに続くように金属の擦過音。

大きくて、それでいて甲高いその音に、反射的に彼は両手で自身の左右の耳を塞いだ。

「——何事？」

空気を叩くような音の振動を、肌を感じなくなりおっかなびっくりで耳から手を離すと、とても聞きなれたエンジン音が聞こえてくる。

その事に理解が追いつかず、彼はそんな言葉を漏らすしかできなかった。

「……………」

「タカシくん？ 一体、外で何が？」

「あ、えっと、十式戦車が空から降ってきました」

「……………」

「はい？……………えっと、ん？」

「お気持ちわかりますし、自分でも何言ってるのかと思いますけど事実です」

「……………」

「はあ、まあ、確かに戦車の駆動音も聞こえますけど……学園長、何か心当たりは？」

「……………」

「……学園長？」

そこまで会話して、先ほどの轟音行こう何も喋っていない学園長に首を傾げる。

そして、耳を澄ませてみると、確かに学園長は反応をしていた。

「あの赤い車って、今日僕が乗ってきたのに似ているな。今日は自動車部と例のレースもあるし、とっておきの車を降ろしてきたのだけど、はは、もしあんなことになったら大変だな……………現実

逃避はよそう。そう、あれは私のくるまでですよ、ええ。さつきから上下逆転したナンバーがこれでもかと自分の視界に写っていますよ。何ですか？追いつき打ちですか？そうですか……………」

今ばかりは、自分の聴こえすぎる聴覚を呪う彼であった。

「……………タカシくん、説明もらっていい？」

小声で喋る彼を一瞬訝しむタカシであったが、その何とも言えない表情と窓際に突つ伏す学園長の様子からある程度察したのか、彼と同じく小声で説明をする。

「さっきの着陸した戦車がそのまま、学園長のものと思いき赤い車を、その……………プレスしました」

聞かなければ良かったと心底思ったが、このまま学園長をそつとしておくのもあまりにも不憫であると感じた彼は想うがままにタカシにあるお願い事をする。

「……………その十式の戦車長をここに連れてきてください————絶
対に」

後にタカシは語る。

これまで彼と会話した中で、あそこまで意思の籠った『声』を聞いたのはあれが最初で最後であると。

説教

その日、蝶野亜美はいつもとは少し違う仕事を受けていた。その内容は戦車道を再開する高校生の指導というものである。

若い頃から戦車道に打ち込んできた女性の一人として、自分たちの後輩であり新世代の選手たちの面倒を見ることは大変かもしれないが、やりがいのある仕事であると彼女は意気込みを見せた。

そしていい刺激となると考え、自身が乗る戦車まで持ち込み演習は開始された。

その時、思いがけない再会もあったが、演習自体は特に問題もなく終了する。

自身が打ち込んできた戦車道におっかなびつくり挑む後輩の姿に、自然と頬を緩めていた彼女であったが、見覚えのない青年に理事長室に来るように言われ、そこにいる人物と対面してからは上がっていた気分が一気に急降下した。

「お久しぶりですね、蝶野さん？」

平時であれば再開を喜んでいた相手。

しかしそんな相手が表情は笑顔であるが、なぜか雰囲気はピリピリしているのだ。

「再開を喜びたいところではありますが、まずはハッキリとさせておくべき事があります」

先の演習で勝者となった戦車チームの一人に彼の娘がいた時点で、今現在家元が血眼で探している二人の内のもう一人がいても何も不思議ではないことに、彼女は後から気付いた。

「取り敢えず——」

既に春も超え暖かくなってきたというのに、なぜか冷や汗が止まらない彼女。

「——正座しなさい」

この時、勢い余って土下座しそうになったのは、彼女の中だけの話である。

「演習に一生懸命なのは構いません。しかし、指導する側だからこそキチンとした行動を行いなさい。ん？『車は保険が効くから大丈夫』？——本気で言っていますか？貴女が言っているのは、怪我は治るからいくらでも相手を怪我させていいと言っているのと同じですよ。それでは戦車道の選手云々以前に人として問題です。はい？『あれは自分も意図したものでなかった。あくまで事故です』？——指導する立場であるのであれば、それこそ危険性を説くためにこういった事故をしないようにすべきです。戦車道であるから物が壊れるのは当たり前だと、甘えた考えを持っているのであれば、今すぐ戦車道の選手をやめなさい」

言い過ぎな部分もあるが、普段は温厚である彼がそれほど怒っている証拠である。

一方で、説教をされている蝶野は説教による精神的な負担と正座による肉体的な負担がピークになっていた。しかも、ぼそりと呟いた言い訳も全て彼には聞こえており、それすらも燃料投下になっていた。既に彼女のメンタルはボロボロであった。

しかも、それを『初恋の相手』にされているというのが、彼女の追撃に拍車をかけていたりする。

「はあ………これ以上は僕が言ってもしょうがないですね。学園長？」

「はい？」

「どうします？壊されたのは、あくまで貴方の私物です」

「えっと、修理費の一部を負担して頂ければありがたいですね」

こうして、蝶野への説教は終わりを告げた。

未だに本人は青い顔をしていたり、足が痺れてうまく立ち上がれなかったりするが、それはそれである。

「……そろそろお暇しましょう。思ったよりも長居をしてしまいましたし」

「え？あ、はい」

説教の間、何故か一緒に萎縮してしまっていたタカシは生返事を返

すことしかできなかつた。

「ま、待ってください」

「？」

帰ろうと車椅子を動かそうとしていた彼を止めたのは、正座していた場所の近くに位置するソファアームに縋り付くようにして立とうとする蝶野である。

「えっと、師範……奥様が実家の方で、その……荒ぶってらっしゃいますけど……いいのですか？」

イタこそばゆい妙な感覚の両足を何とか立たせながら、彼女は彼にその事を伝えた。

その彼女の言葉に少しだけ思案顔になる彼。

「………うん。いい情報をありがとうございます。でも、僕たちがここにいることは連絡しないでくださいね」

数分の熟考の末、“イイ”笑顔で感謝の言葉を口にした彼は、来た時と同じようにタカシに車椅子を押ししてもらいながら帰っていく。

その彼の言葉にどう反応していいのか困惑する蝶野。その傍らでは、学園長がどこか寂しげな目で、閉じられた扉を見つめていた。

そんな学園長の脳裏には、数十分前に行つた彼とのやり取りが思い出される。

扉の閉まる音。そして、パタパタとスリッパで歩く足音が離れていく。お願いをして、了承してくれたタカシに彼は内心で感謝した。

そのタカシの足音を聞きながら彼は疲れたため息を吐き、重くもないう体を車椅子に預けた。

「やはり、辛いのか？」

凜とした声が彼の耳朶を打つ。

この学園長室には、自分と先程まで項垂れていた学園長の二人以外いないかつたことからその声の主が誰であるかは自然と断定される。

「………学園長？」

「違和感があった。最後に会つたとき、少しの距離であれば歩けたお前さんが今日は終始車椅子に座りっぱなしだ」

タカシが退室してから、口調が一変する学園長。それはプライベートルトと仕事をキチンと線引きしようとする学園長の昔からの癖であった。そして、少し粗野な今の口調こそ元来の彼の口調である。

「正直に答えて欲しい……もう長くはないのか？」

「……………」

短くも重いその言葉に彼は無言であった。

だが、彼の表情は語る。

笑顔で——伝える。

「——そうかい」

そこにどんなやりとりがあつたのかは、当人同士にしか分からない。だが、彼は学園長に確かに何かを伝えていた。

「そう言えば、懐かしいと言えば、今大洗におやつさんが住んでいるぞ」

「え……榊さんが？」

重苦しい雰囲気吹き飛ばすように、学園長は新しい話題を振ってくる。案の定その話題に彼は食いついた。

「ああ、お孫さんがウチに通っている。自動車部でな。あの人と一緒に油にまみれながら整備をしているよ」

話題のおやつさんこと榊と言われたのは、彼やしほがまだ若い頃に戦車道関係でお世話になった人であった。

もちろん、呼び方がおやつさんであるとおり男性であるのだが、彼は戦車道に限らず乗用車や工業関係の整備士として腕利きで、しほも自身の戦車チームがお世話になったことがあるのである。

しかも、そちらの業界では有名人らしく、戦車道連盟や西住家の前家元であるしほの母親も頭が上がらないのだ。

そんな人物と彼は学園長とは別の場所で、同じ時分に出会っていた。

「まあ、お前さんの娘と同じ学校なのも何かの縁だ。今度、挨拶に行くのなら住所は教えといてやるよ」

「ああ、それは助かります」

そして、時間は過ぎていく。

誰に対しても平等に。

親御

『T o : お父さん』

S u b : 今日の晩御飯

本文：戦車道の友達と今日の晩御飯を一緒に食べることになりました。それで、よければお父さんたちも一緒にどうかと思つてメールします』

受け取つた人生初の娘からのメールはそんな内容であつた。

大洗に来てから、必要になると思ひ購入した携帯電話に着信メールがあり、タカシが内容を読み上げてくれる。

「娘さんがメールを送ってくるのは、珍しいですね」

「今日は一応古い友人と会う事を言つていたから、みほなりに気遣つたのかな？」

そんな会話をしつつ、晩御飯の事を考える。

流星に自分に慣れていない娘の友達と一緒に食卓を囲むのは、お互いに気を遣うかなと考える彼。そして、年頃の娘がやつとできた友人と気兼ねなく喋るのであれば、親である自分はお邪魔になるかな、とも考える。

幾分か考えた末に、彼は未だに携帯を持つているタカシに返信をお願いした。

『T o : みほ』

S u b : 代筆担当、タカシ

本文：気遣つてくれてありがとう。お誘いは嬉しいのですが、友人に夕食をお呼ばれしたので、そちらでお世話になります。みほはみほで、友達と夕食を楽しんでください。それと、友人の人数が多いのであれば、ウチを利用するのは構いませんが、仕事場には通さないでください』

そんな内容の返信を送ると、すぐに娘から了承のメールが届く。

それを確認し、車椅子の収納スペースに携帯をしまつてもらおうと、彼は取り敢えず一言口にした。

「さて……タカシ君、夕飯をどうしましょうか？」

見た目年若い男二人が、道端で途方にくれる姿はどこか間抜けであつた。

「今更、大洗に戻るの……悪いですよね？」

「あく……学園長は自分の車の処理もあるでしょうね、きつと」

数時間前に聞いた、鉄のひしゃげた音を思い出しつつ、彼は考える。

一般的な飲食店で、彼が食べられる物を出すお店は少ない。そして、陸であればともかく、若者向けのお店の多い学園艦では、そういったお店は本当にまれであつたりする。

どうしたものかと首をひねる二人。

だが、その悩みは意外な解決を見せた。

「あら、この間の？」

第三者の介入である。

「その声は……秋山さんですか？」

聞いたことはあるが、聞き慣れているわけではない声に彼はそう返した。

「そうです。以前はサインありがとうございました」

「こちらこそ、散髪ありがとうございました」

「いやですよ、それが仕事なんですから」

どこか井戸端会議のようになりつつある空気に、タカシは居心地の悪さを覚える。そして、その感覚を覚えるということは自分がまだ若いと、よくわからない再確認をしていたりしたが、それは本当に余談である。

「ところで、お二人はこんなところでどうかしたのかしら？」

二人がいた場所は、近くに店や目立った建造物のないただの住宅街だ。そんな場所で立ち止まっていれば、他人の気を引くには十分である。

「実は——」

それまで黙っていたタカシが口を開く。その事に少しだけ驚きながら、彼はタカシに説明を任せることになる。

「あら、それならウチで食べますか？」

「え、それは——」

「もしご迷惑でなければ、お言葉に甘えさせてもらえますか?」

「ええ、ちょうどウチの娘も友達の家で晩御飯を済ませるみたいなので、食材があまるのよ。うちの人も喜ぶわ。あの人、娘がいないと寂しがるから」

寂しがるという言葉にぴくりと反応しながらも、彼を置いてきぼりにしつつ話は進んでいく。

「これから少しだけ買い物してから店の方に戻るので、先にお店の方に向かってもらえますか?」

「分かりました。先生の食事は自分も用意しますので、料理はお手伝いします」

「あら、頼もしい」

そして、二人は秋山理髪店に、一人は近くのスーパーに向かって分かれる。

お互いの姿が見えなくなってから、これまで沈黙していた彼は自身の車椅子を押す青年に対して口を開いた。

「タカシくん?」

その声はどこか問い詰めるような声音である。

「言いたいことは分かりますよ。でも、知り合いで頼むことができる人がいるのであれば、貴方の場合は頼るべきです」

ピシヤリと言われ、それ以上は反論のしようがなかった。ハツキリとした物言いをしてくれる人であったタカシという人物に感謝しつつ、彼は似たような事を若い頃に言われたなど、柔和な声を出す一人の女性を思い出す。

そんなやり取りをしつつ、時間は過ぎていく。

それからの経験は彼にとって、真新しいことや懐かしいことに溢れていた。

理髪店に到着してから食事の準備ができるまで、親の散髪が終わるのを待っている子供に歌を聞かせて、若い頃に病院でも似たような事をしていたと懐かしむ。

秋山理髪店の主人である秋山淳五郎と娘談義をしたりもした。

そして、タカシ監修のもと作られた秋山好子作の食事を食べる時には、家族以外の人との団欒という彼にとっては珍しい体験もした。

その騒がしくも心がいっぱいになる日常を送る中で、彼の中で様々な音が幾つもの歌となっていく。

音と音が絡み合い、解け、そしてまた束ねられていく。

その瞬間一つ一つを、彼は残したくて堪らない気持ちになっっていく。

早く、速く、疾く、紙面にこの生まれた音を残したい。

そんな逸る気持ちを抑えつつ、彼はタカシと共に秋山夫妻に別れを告げるために、食事の片付けの手伝いを終え、家の玄関にいた。

「それでは、お世話になりました。晩御飯も美味しかったです。ご馳走様でした」

「また来てくださいね。今度はお互いに娘がいればいいのだけど……って、アナタ？」

笑顔で別れの挨拶をしている好子の後ろで、何故か涙ぐむ淳五郎の姿がそこにはあった。

「くう！娘と同じ学校の生徒の親御さんとこんな親密な関係を築けるなんてっ！」

「ほらほら、泣き虫なんだから。ごめんなさいね、うちの人こう見えて繊細なのよ」

感極まっている夫をあやしつつ、そんなことを言ってくる妻の言葉に苦笑いを返すタカシと、何故か同意するようにうんうんと頷く彼であった。

その頃の西住家（大洗）

「え、じゃあみほのお父さん今いないの？」

「うん、お友達と晩御飯食べてくるって」

「それは気を使わせてしまったのでは？」

「大丈夫ですよ。タカシさんも付いているので」

「お手伝いの人だっけ？」

「正確にはマネージャーかな」

「マネージャー……今更ですけど、みほさんのお父様の職業って」

「ああ、えっと」

「……………西住殿、もしかして作曲の仕事ではないですか？」

「優香里さん、知ってたの？」

「いえ、その、以前うちの店に来ていたみたいで」

「……………そう言えば、今大洗には作曲家の『弥栄縁』が来ているらしい」

「え、それってあの有名な？」

「映画とかCMとかドラマとかで、よく聞く歌を作ってるあの？それ本当なの、麻子？」

「真偽は知らん。あくまで噂だ。何でも道を歩いている時に歌を歌っているとか聞いたが」

（……………お父さんだ）

その頃の西住家（本家）

「……………それで奥様は今日も旦那様の部屋で寝泊りを？」

「はい……………あの、菊代さん？お手伝いの一人である私が言うことではないかもしれませんが、奥様にせめて旦那様がどこにいるのかくらいは……………」

「言いたいことは分かりますが、今そんなことをすれば奥様は全てを捨てて行ってしまいますよ？それは旦那様の望むところではありません」

「しかし……………」

「大丈夫です。まだもちますよ、奥様は……………あと一週間くらい？」

その頃の黒森峰

「最近、隊長の様子どこがおかしくない？」

「あ、それは私も思った。何か落ち着きがないって言うか」

「そう言えば、近頃よく音楽を聞いているみたいだよ。イヤホンをよ

くしているの」

「音楽？……そう言えば、隊長のお父さんって」

「あ、作曲家の……あれ、確か今は」

「しっ！それ以上はここではタブーよ」

「……今ので思い出した。最近、別の学園艦で変わった音楽家が出没するらしいよ」

「音楽家？ストーリーミュージシャンってこと？」

「ううん。何か道を移動しながら歌うんだって」

「何それ？」

「後は、店の中で流れているBGMを変化させるとか何とか」

「いや、だからなによそれ？」

「さあ？あくまでネット上の噂だから」

「その話詳しく聞かせてもらおう」

来襲

ほっそりとした腕と手は、その部分だけを見れば、老人と見間違えてしまいそうになる。

肉付きが良いとも言えなく、一見すれば誰でもその人物が健康的ではないと判断できる腕。

その腕が今、その姿では考えられない程しなやかに、軽やかに、緩急織り交ぜられながら動いていた。

「」
右手は持った撥を動かし、左手は張られた弦を時に短く、時に長く抑える。

右手は音を生み、左手は音の調和をこなす。

「」
普段から車椅子に乗り、ペンや箸以上に重いものを持っているイメージを抱かせない彼。そんな彼が、三味線の太棹を引いているのだ。

音楽に興味を持ち始めてから、彼が一番初めに引き始めた楽器。それが三味線であった。

彼が三味線に手を出した理由。それは三味線が、目が見えなくてもできる楽器ではなく、「目が見えない人がするため」の楽器であったからだ。

日本の古い時代、現代ほど職業に幅がなかった頃に盲人がお金を稼ぐ方法は限られていた。その内の一つが三味線奏者である。

彼はそれを本で読み——ひどく惹きつけられた。

「——っ！」
弾き始めてから数分。

コンクールと違い、時間の制約がないため長い曲を彼は弾いていた。

だが、時間に制約がなくとも、肉体的な制約が彼にはある。だから、弾けば弾くほど、曲が長ければ長いほど、彼にとっては肉体的な疲労

が大きくなる。

曲も既に終盤に差し掛かり、最後のテンポアップが待っている。だが、弾き始めとは違い既に鈍くなってきた腕の感覚が、それを障害する。

「——」
その感覚に彼は一瞬苦い顔をした。

そう——たった「一瞬」だ。

（腕が重い、汗をかくほどに体も熱い、指も痺れてきた——でも、楽しい）

その苦しく、重い感覚さえ味わうように彼は弾く。まるでそれを感じていることが生きている証であるように。

撥で弦を弾くことで生まれる音。一瞬で失われてしまうその音を自身に刻み付けるように彼は弾き続ける。

そして、その演奏の幕引きは訪れた。

「——……………はあ」

最後まで弾き終え、余韻が空気に溶け消えると彼は肺に貯めていた空気を吐き出すように、息を吐き出す。

そして、最後の締めとしてぺこりと一礼。

すると彼がこれまで演奏していた場所——ある和食料亭の小さな壇上の前にいたお客から大きな拍手の音により埋め尽くされた。

「はあ……………はあ……………」

たった数分の中で全てを出し切ったのか、彼はその拍手を笑顔で受けながらも、上がった呼吸をなかなか整えられないでいた。

「よお、お疲れさん」

「榊、さん……………」

「ああ、いい、いい、そのまま楽にしてな」

壇上から下りた彼に話しかけてくる老人がいた。

大きめのサングラスをかけ、白髪をオールバックにまとめたその老人は彼の事情を知っているために、礼儀の言葉よりも自身の体の気遣いを優先させるように促す。

「久しぶりの再会に、お前さんの演奏を聴けるとは思わなかったぜ」

「はあはあ……ふう………こちらも榎さんとの再開で自分の演奏を聴いてもらえるとは思っていませんでしたよ？それも同じ大洗といえ、まさかの『陸』で」

呼吸を落ち着けてから彼はそう返す。

そう、彼の言葉通り、今現在彼の居る料亭は大洗学園艦の街ではなく、寄港した大洗の港の近くにあった。

何故、彼が陸の料亭で三味線を弾いていたのか。

その理由は、旧知の間柄である老人——榎さんとの再開にあった。

大洗学園を訪問した後日、学園長から受け取った「おやつさん」と榎さんの連絡先を受け取った彼は、早速出会えないかと連絡を取った。

しかし、お互いに多忙とまではいかないが、それなりに予定が詰まっていたため、少し間を置くこととなる。その結果、大洗学園艦が母港である大洗に寄港するタイミングで会食をするということに相成ったのだ。

ここまでは、彼らが陸の料亭にいる経緯である。

ならば何故、彼がそんなところで三味線を弾いているのか。それはある意味お人好しな彼の性格に原因があった。

「本日は本当にありがとうございます」

「いえ、そんな……こちらもお食事のことで気を使って戴いていますし」

「滅相もない。ウチはお客様にお食事を提供することこそ喜びとし励ませて頂いております。それに急な代役を依頼すると言う失礼なこともしまっています。なので、今回お代の方は結構ですので、少しでもお返しをさせていただきます」

料亭の女将が、彼が店から借りていた三味線を受け取りながらそう言い頭を下げる。

壇上を降りてから、料亭の一室に通された彼とタカシとおやつさんの三人。その三人はある意味で丁重な扱いを受けていた。

話を纏めると、偶々店内で耳にした三味線奏者の病欠により中止に

なりそうであつた演奏の話を、彼が自分から代役を提案し引き受けたのだ。

当初は店側もいきなりの彼の話に困惑していたが、彼の隣にいたおやつさんの姿を見るとその困惑も鳴りをひそめる。

今回三人が訪れた料亭はおやつさんの行きつけであり、その女将や大将とも親しい間柄だったのだ。

そのおやつさんが「コイツなら大丈夫だ。安い腕じゃねえさ」と言い出し、店側も彼に正式に依頼した。その結果が、当初の店での演奏である。

「女将もこう言つてんだ。自分の持つてる技術を安売りするもんじゃねえ。貰えるもんは貰つちまいな」

「えつと……うん、じゃあ、今回はご馳走になりますね」

女将からの提案に渋るような言葉を吐こうとした彼におやつさんが言う。少し申し訳ない気もするが、そう言われてしまえば彼も特に断る理由もなかった。

そして、いくらか言葉を交わしてからその個室には三人だけとなる。座敷であるため、長机に座布団があるだけなのだが、彼の場合は店側の配慮で用意してもらつた座椅子に座つていた。

疲れたのか、少しだけぐつたりした彼の隣にお付き役のタカシ、そして机を挟んだ向かい側におやつさんという位置づけである。

ぐつたりしている彼のよこでは、控えめに言つても高級料亭の部屋に萎縮しているのか少しだけ居心地が悪そうであった。

そんな中で口を開いたのは、この面子の中で最年長のおやつさんである。

「それで？久方ぶりに再会してみりゃ、姉妹の片割れ連れて大洗に引越したあ、何かあつたのかい？」

「あはは……少しあつて、今は親子仲良く家出中です」

出されていたお茶を啜りながら、おやつさんはどこか呆れた表情を目の前の見た目は子供、中身は大人を地で行く彼に向ける。

「あの嬢ちゃんがよくもまあ許したもんだ」

「家出ですから、無断ですよ」

「……………お家の方はいいのか？てんやわんやだろうに」

そのおやつさんの言葉に笑顔で返すあたり、彼は本当にいい性格をしている。

「大丈夫ですよ。それにそろそろ追いついてくる頃ですし」

「？」

一息つくためにおやつさんと同じように、タカシに手を誘導してもらいながら茶碗に手をつける。

そんな彼の落ち着き払った態度と言葉に解せない表情を浮かべる残りの二人。

どういふことか詰め寄ろうとおやつさんが口を開こうとした瞬間、その音は聞こえてきた。

「……………足音？」

「……………そういうことか」

ポツリと呟いたのはタカシ。そして妙に納得した顔をしたのはおやつさん。

その言葉が数秒もせずうちに、部屋の出入り口である襖の扉がスパンと開かれる。

「……………貴方？」

「……………父様？」

はたしてそこにいたのは二人の女性と少女。彼の妻子である西住しほとまほの二人であった。

二人はそこにゆっくりとお茶を飲む彼の姿を視覚的に確認すると、必要最低限すべきことを口にした。

「貴方は少し出ていてもらえますか？」

「え？ア、ハイ」

急すぎる来訪者に呆気にとられていたタカシは自分に向けられた眼光を見るやいなや、そう答えるしかなかった。

寧ろ、一刻も早くこの場から去りたいときえ思ってしまう。何故なら、タカシに退室を促す二人の女性の目からハイライトが消えていたのだから。

頭の片隅で先生である彼の世話をするためにも退室するわけには

いかなないと考えつつも、本能が離脱を命じてくる。

(先生……………不甲斐ない僕を許してくれますか?——ああ、アリサ。君の言っていた通り、世間はそんなに甘くなかったよ……………)

この道を進む事を引き止めた後輩の女の子の姿を思い出しつつ、タカシはそそくさと退室していく。

タカシが退室した時点で、この部屋の中にいる人間は西住家の三人だけとなる。もう一人いたはずのおやつさんはタカシよりも先に「年を取るとトイレが近くなっていけねーや」等と言いながら、とつくに部屋から退散していた。

「……………良かった」

タカシの足音が聞こえなくなり部屋の中が静かになると、しほは安堵の息と共にそんな言葉を漏らした。

「……………急になくなって心配しました」

「……………」

「……………貴方?」

しほとまほが入ってきてから一言も喋らず、また反応も見せずにお茶を啜る彼にしほは違和感を覚えた。

タカシが退出した瞬間、首に齧り付くように密着しているまほすら無視して、だ。

どうしたのだろうかと彼を呼ぶしほ。しかし、返ってきたのは湯呑を机に置く硬質な音であった。

「あ、貴方?」

「父様?」

打ち付けるようなその音に、近くにいた二人は肩を震わし驚く。普段の彼女たちからは考えられないその反応。だが、二人からすれば今の彼の態度のほうが考えられないどころか、ありえないものを見た心境であった。

「心配したのは僕だけ?」

「……………」

その問いかけに二人は苦い顔しか返すことができなかった。

「しほさん」

「っ」

名指しで呼ばれ、先ほどよりも大きく肩を揺らす。

「今晚はみほが御飯を作ります。だから、三時頃には弥栄の家にいますよ」

「！……………ありがとう、貴方」

短い返答とともに彼女は踵を返し、部屋から、そして店から出て行く。

先ほどと同じく遠ざかる「二人分」の足音を聞きつつ、彼は演奏で未だに疲れている表情筋を緩ませた。

「さて……………まほ？そろそろ僕の首元に顔を埋めるのをやめて、さっきの二人を呼んできてくれるかな。昼食を食べよう」

「……………お父様は、私を見捨てませんか？」

懐かしい質問をされる。

はじめは懐いてくれなかつたまほが父親を好きになる切っ掛けとなつた会話。

それを思い出しつつ、緩めた表情のまま彼女の髪を梳くように頭を撫でてやる。

「まほとみほ。僕には二人の娘がいるけれど、二人の父親は僕だけだ。だから、そんな寂しいことは言わないでくれ」

彼は見る事ができないが、その言葉にまほは破顔し、そして年相応の嬉しそうな表情を浮かべていた。

親子

西住まほにとって、幼い頃の父親は少し怖い存在であった。

理由は単純で、いつも目を瞑っているのにまるで見えているように行動する彼が、幼い頃の彼女にとっては不気味に思えたからだ。

なら、どうして彼女は父親である彼のが好きになったのか。それもある意味で子供らしい理由であった。

「貴方は西住の長女です」

親ではなく周りから言われ続けた言葉。

それを誇りに思うようになったのは、母親であるしほの姿を見ていたからだ。まほはその堂々とした姿に幼いながらも憧れたのだ。

そして彼女は彼女なりに、西住家の長女として相応しくあろうとした。

もちろん未だに小学生にもなっていない彼女にできることは多くなく、精々が親の手をかけずに自分のことは自分でする程度であったが。

そして、言動や行動も憧れる母親の真似をし、凜とした態度を取るようになる。

だが、それとは真逆の存在が彼女にはいた。
妹のみほだ。

彼女はどちらかといえば手間のかかる子であった。子供らしい失敗も多いが、物怖じすることなく、何でも挑戦しその度に周りの大人をハラハラさせていたりする。

その点、まほは色々と器用だったのだろう。失敗しないように慎重に事を成そうとする彼女は、あまり失敗をすることがなく手のかからない子であった。

だが、それが彼女にとって幸せであったのかはまた別だ。

子供にとつて、大人から気をかけてもらえるというのは愛情を受けていると同義だ。そして、この二人の姉妹のウチより気に掛けられていたの言うまでもなくみほの方であった。

その事をまほは不満に思うことは意外にもなかった。何故なら、彼女も妹のことは好きであったのだから。だが、そこに寂しさを感じないことはありえない。何故なら彼女も子供なのだから。

そして、その寂しさを感じるようになってから、彼女はある実験をし始める。

それは、みほが大人たちに構ってもらっている間、まほが隠れてそれを探しに来る大人がいるのかどうか、というものだ。

要するに彼女なりの、周りの大人に対する構ってもらうためのアピールである。

そして、そんな彼女の試みは一発で結果が出ることになった。

「まほ、どうしたの？」

母屋から離れた戦車の車庫。その中に置かれている西住家保有の戦車のうちの二両の中に隠れていたまほ。隠れ始めて三十分もしないうちに、問いかけるようなそんな言葉が彼女の元に届いたのだ。

「おとうさん？」

幼く小さな身体で戦車の外によじ登るようにして出てきた彼女は、車椅子に乗りいつものように目を閉じている父親を不思議そうに見つめながらそう呟いていた。

それから幾度となく同じことをしたが、結果は同じ。どこに隠れようともまほを最初に見つけるのは父親である彼であった。

「おとうさんはどうして私の場所がわかるの？」

幾度目かのかくれんぼの帰り道。ふとした疑問を彼にぶつけるまほ。その答えは簡潔であった。

「だって、まほは僕の娘で、僕はまほのお父さんだから」

「——おとうさんってすごい。なら、ずっとまほを見ていてくれる？」

笑顔で返されたその言葉に、幼いまほは目を輝かせながらそう聞いた。その返答は、彼女に負けず劣らずの笑顔と、ふわりと頭に置かれた掌の優しい感触であった。

この頃から、彼女の中で父親という存在がよくわからない存在から、自分をずっと見てくれる優しい存在へと変わる。

「父様、あーん」

「……………いや、だからね。まほ、僕は自分で食べられるよ?」

そんなまほにとつて、最重要で何千、何万と思ひ返している思ひ出を再び思い出しながら、膝に載せた父親の口元に昼食の雑炊を掬った木匙を運ぶ彼女であった。

「この雑炊は少し熱いので、手馴れている私が父様に食べさせるほうが安全です」

「そんなに凛々しく言ってもダメだからね?……………それと、時々首の辺りに顔を近づけるのやめなさい。息が当たつてくすぐつたいから」

今現在、西住まほにとつては至福の時間であった。

その二人の親子のやり取り——と言うには少しあれであるが、その姿を見ていたタカシとおやつさんは最初は呆れた表情をしていたが、気にするのがアホらしいと思うと二人は二人で昼食を楽しんでいた。

「父様は私が嫌いですか?」

「そんなことはありえないから。と言うか、僕の事を考えてくれるなら、自分で食べさせてくれ」

不毛なやり取りをしつつも、なんだかんだで食事は進む。

甲斐甲斐しくと言うには、少しやりすぎな世話をしながらも自分の食事をきつちりと終わらせるまほに「もはや何も言うまい」と思う三人であった。

そして食事も終わり、お開きの時間はやってくる。

「今日はありがとうございました」

「気にするな。こっちも懐かしい顔に会えたんだ。それにお前さんの演奏っていう珍しいもんも聞けた。得をしたのはこっちも同じだ」

料亭での会計を終える。

その後、店の外でおやつさんとの会話をしつつ、背後でまほが落ち込んだ声で「父様の……………演奏……………」などと呟いているのを全力でスルーして、握手をする。

「そこの嬢ちゃん、家元の嬢ちゃんも来てるってことは戦車道の予

選会もそろそろか」

「ええ。……家出のことも含めて、少し目立つようにはしてましたし」

全国戦車道大会。

今年から戦車道を復活させた大洗女子学園の戦車道チームはそれに参加する予定であった。そして、何の因果か今年の予選抽選会はここ大洗で行われる。

その為、参加する各高校の戦車道チームの代表は大洗に集まってくるのだ。

それを把握していた彼は一計を案じた。

昨今、インターネットなどの情報伝達が早く、広い社会の中で、噂程度でも自分の存在を匂わせる何かを彼ははしてきていた。

例えばそれは、学園艦という閉鎖的な空間の中で、散歩に出る時に歌を歌う車椅子の男がいる”というもの。

例えばそれは、ある学園艦に有名な作曲家が来ているというもの。大きな情報としてはそんなところである。

そして、その情報と言う餌に必ず家族である二人は食いつくと踏んでいた彼は、料亭での演奏の前にタカシに頼み、ある女性にメールを送ってもらう。

そのメールの内容は、その料亭の住所とそこで行われる演奏のことであった。

「その女性ってのは……」

「まあ、簡単に言えば共犯者ですよ」

そこまでの説明を聞いておやつさんは少し呆れていた。

現在の西住家を仕切っている、若しくは手綱を握っているのはこの男ではないかと思いつながら。

「じゃあ、おれはもう行くぜ。家族は大切にしろよ——今のうちにな」

最後の言葉は彼にしか聞こえなかった。

(流石榊さん……見透かされている)

自身の車に乗り込みながら、大洗の学園艦の方に帰っていくおやつさんを見送ると、今度はタカシの方に彼は向き直る。

「タカシ君。今は娘もいるので、今日はこれからオフで構いません」「は？」

「ウチの娘がここに居るということは来ていると思いますよ？貴方の後輩」

そこまで言われて、タカシはハツとする。

しかし、母校の後輩の姿を思い浮かべると同時に職務放棄と言う言葉も脳裏によぎる。

その為、迷う素振りを見せるタカシに対し、彼は出来るだけ優しい声音で言葉を投げかける。

「短期とは言え、今日までほとんど休みもなかったので、羽を伸ばしてきてください」

「そんな！先生との生活に不満を感じたことはないですよ。………でも、その、ありがとうございます」

一度頭を下げ、失礼しますと言い残すと、タカシは携帯を取り出しながら大洗の街に駆け出していった。

「父様、彼は？」

「後輩がサンダース高校で戦車道をしているそうだよ」

その説明だけで納得したのか、それとも二人きりになれたところに他人の話をこれ以上する気がないのか、まほがタカシについて尋ねてくることはなかった。

「さて、少し早いけど戻ろうか？演奏して少し、疲れた」

満腹と疲労感から、心地よい眠気がやってくる。

その身を預けてしまいそうになる感覚に抵抗しながら、彼はまほに現在の住所を口頭で伝える。

そして、久方ぶりに娘に車椅子を押してもらいながら、二人の親子は実家とは異なる家へと向かう。

「父様………その、母様とみほは大丈夫でしょうか？」

その道中、思い出したようにまほは口を開く。

今更になって不安になってきたのか、まほの声は不安に満たされていた。だが、そんな不安を振り払うように、彼はいつもどおりの声で話す。

「大丈夫だよ」

「でも……」

「しほさんはまほとみほのお母さんだからね」

その根拠のない言葉に脱力しそうになるが、その言葉を信じたいと思っている自分がいることに内心で驚くまほであった。

集合

しとしとと雨が降る。

湿った空気は閉じられているはずの窓に関係なく、部屋の中にも入ってくる。

空気がまだ暖かいために不快感があるが、それも見なくても感じる
ことができる季節感であると思いつながら、彼は自室の座椅子に座り何
をするでもなく雨音に耳を傾けていた。

それは黒森峰が決勝戦で敗北した試合から、まだ数日と経っていない
日の夜のことである。

「……入ってもいいよ。まだ起きているから」

雨音の演奏を聞きながら、彼は静かに口を開いた。

すると、部屋の廊下側の麩が静かに横に動く。果たしてそこにいた
のは、寝巻きである浴衣を着て、肩に薄手の上着を羽織ったしほで
あった。

「………貴方」

「うん」

部屋に入り、座椅子の隣に座った彼女は、いつもとかけ離れた弱々
しい声を零し始める。

「……私は、みほに……人の命を救ったあの子に……その行為は
間違っていると言ってしまった」

「うん」

「親として、あの子が真っ直ぐに育ってくれたことを褒めてあげたい」
「うん」

「でも……それが、できない」

「………」

「私は、親として、最低です」

身を切るように、彼女は語る。

自身の心の内を。

それは懺悔であり、自分自身を責め立てる断罪の言葉であった。

「今すぐ、あの子のところに行って謝ってあげたい。抱きしめてあげたい。あの子はきつと傷ついているから」
「うん」

言葉を吐き出しているうち、いつの間にか彼女は座っている彼の膝に顔を埋めるように頭を垂れていた。

そして、悲しくて、悔しくて、たまらなくて、彼女の瞳から溢れ出した雫が彼の膝を濡らす。

「……………ごめんなさい……………ごめんなさい、みほ」

「……………うん」

相槌を打ちながら、彼は膝に感じる重みに手を伸ばし、ゆっくりと梳くように彼女の頭に手を添える。

「……………今はゆっくり休んで」

「あ、なた……………」

喋りにくい程に感情が抑えきれないのか、彼女からの返事は短いものであった。

「……………いっぱい泣いて、いっぱい後悔して、いっぱい悩んで、それから謝ろう?」

「……………っ」

膝に伝わる感触が、彼女が頷いた事を伝えてくる。

「西住として、しほは立派だったよ?だから、僕もしほに置いていかれないように頑張るから」

「……………っん」

また彼女は頷いた。今度は少しだけ彼女の声が聞こえた。

「僕は今、聞いてあげることしかできないけど、それでしほが前に進めるのであれば、いくらでも縫ってくれてもいい。だから、一緒に頑張ろう?」

「っん!」

しっかりと頷く彼女の声が聞こえる。

そこまで言われて安心したのか、先程まで彼の着物の裾をきつく握っていた彼女の手の力が少しだけ緩んだ。

それから、彼の子守唄を聞かされたしほは瞬く間に寢息を立て始め

た。

「……菊代さん？お願いがあるのですが」

しほを起こさないように、小声で廊下の方に声をかける彼。すると静かに部屋に入ってくるのは、そこにいるのが当然といった雰囲気放了菊代であった。

「彼女を僕の布団に運んでくれますか」

「お部屋の方に戻さなくても良いのですか？」

「まほもみほも学校の寮の方にいますし、こんな日ぐらいは……」

「お熱いですね」

最後のからかう様な言葉に、気恥かしさを感じながらも菊代に寝る準備を整えてもらう。

そして、少し大きめの布団に夫婦並んで横になる。

「僕はしほの隣にいる。寂しくないよ」

寝る前にそう言うってから彼も寝始める。だから彼は気付かなかつた。いや、目が見えないため、どちらにしても気付くことはなかったのかもしれない。

そう言われたしほの寝顔が無邪気な微笑みを零したことを。

「——父様？」

呼ばれ、心地よい微睡みの感覚から引き上げられる。

後ろから呼ばれたことと座っている感覚から、自分が居眠りする前は車椅子に座って移動していた事を思い出す。

「うん？……ごめん、まほ。寝ていたみたいだ」

「大丈夫です。それよりももう到着します。一緒に来ていた菊代さんも見えました」

車椅子を押すまほの視線の先、そこには彼と同じく着物を身にまとう一人の女性が、あるマンションの出入り口の近くに設置してあるベンチに腰を下ろしていた。

その女性こそ西住家のお手伝いであり、今回の家出騒動における彼の共犯者でもある井手上菊代その人であった。

「お久しぶりですね、旦那様」

朗らかで柔らかい声音が彼の耳に滑り込んでくる。その声の心地よさに眠気がぶり返してきそうになる彼であったが、自分で自分の手を軽く抓ることでそれを吹き飛ばす。

「お世話になっていきます、菊代さん……………それで、二人はどのような感じですか？」

その彼からの問いに、いつもおつとりとした笑みを崩さない菊代の表情が少しだけ曇る。

「インターフォンでお嬢様は出て来てくださったのですが、ひどく怯えてしまして……………奥様は入室したのですが、それから数分後には何か叫ぶような声が二人分」

親子のそんなやり取りを聞き、もうひと組の方の親子は「うわぁ」と思いつつも、しほとみほがそれぞれ言いたいことを言えていたのだと思うと、少しだけ安心もする二人であった。

「それからどれくらい経ったのですか？」

「小一時間といったところででしょうか」

「頭も冷えている頃かな？……………菊代さん、車椅子の中のポーチに鍵があるのでそれを使って入ってください」

言われた通り、菊代は彼の車椅子に手を伸ばし、目的の鍵の付いた鍵束を取り出す。

そして、三人は西住の表札ではなく、弥栄の表札がかかる方へ足を運ぶ。普段から、彼が外出をしている時にはチェーンロックは掛けない決まりにしているため、鍵を開けるだけですんなりと扉は開いた。

中に入り、玄関に備え付けの雑巾で車椅子のタイヤを拭いてから、リビングの方に向かう。

「ああ……………よかった」

「父様？」

リビングと廊下を隔てる扉を明ける前に彼がそんな言葉を漏らす。

反射的に彼を覗いたまほは、安心し、弛緩した表情を浮かべる父親の表情を見ることとなった。

そして、リビングの扉を開くとそこには彼がそのような表情をしたのに納得のいく光景があった。

「……………すう……………すう」

「……………」

リビングに設置されたソファ。そこには頬に涙の跡をひきながらもどこか安心したような表情を浮かべながら寝息を立て横になっているみほの姿と、そのみほの頭を少しぎこちないが壊れ物を触るように撫でるしほの姿があった。

よく見るとしほの頬にも幾筋かの跡があったのだが、それは見なかったことにするまほと菊代の二人であった。

「菊代さん、申し訳ないのですが、隣の西住の表札の部屋から薄手の毛布を持ってきてくれませんか？僕の部屋でも、みほの部屋のものでも構いませんので」

先ほど取り出し、一旦返された鍵束を再び取り出しつつ、菊代は静かにリビングをあとにする。

そして、『西住』という家から遠く離れた、『弥栄』の表札のかかる家に四人の親子が勢揃いした。

「……………多分、急にいなくなった事とか色々と言いたいことはあると思うけれど——」

静かになった部屋。

その静寂を破ったのは、一家の大黒柱たる父親であった。

「今日は御飯を食べよう。皆で一緒に」

それはある理由で果たせなかったこと。

全国戦車道大会で黒森峰が敗北したあの日。もし試合に勝っていたら。そして、もしあの日彼が寝込んでいなかったら———そういった、もしもが積み重なっていれば実現できたこと。

それ以降、それぞれの都合やら何やらですることができなかった、家族四人揃っての食事。

それを笑顔でできるようにする。

それが今回の家出における彼の掲げた目標であった。

逢引

唐突ではあるが、西住家の女性陣は総じて家事能力が高かったりする。

理由は単純で、父親である彼の存在があるからだ。

詳しく言えば、しほは結婚する前から彼との付き合いで、彼のお世話をすることも少なくなかった。そして、彼の家で細かい世話の仕方を彼の母親である紬から聞き、食事の作り方も習っていたりするのだ。花嫁修業を意中の相手の母親から教わるという事に、思うところがあつたりなかつたりするしほであるが、それで彼の面倒を見られるようになるのであれば、安いものだと言っただけではいたが。

そして、まほとみほの二人は幼い頃からお世話をされる父親を見てきた。それだけであれば、特に家事は身につかないのだが、二人の場合はそれを出来る範囲で手伝ってきていたりしたので。何故なら大好きな父親に構ってもらえる時間が増えるのだから。

こういった理由のため、西住家の女性陣の家事能力は高い。

とは言うものの、父親である彼も着物や服の折り畳みなどは普通に行えるが。

「うちそうさまでした」

要するに、いつも仕事やら何やらで家事を家の女中にまかせっきりの西住家でも、平均的な一般家庭の食事よりも美味しい物を作れたりするということである。

大洗の弥栄の家で、西住家と女中の菊代は夕食を終えていた。

作る側にならない珍しい食事を終え、流石に何もしないのは沽券に關わるということの後片付けをし始めたのは菊代であった。

それに続くように、二人の姉妹は一緒にお風呂に入るらしい。

介護もできるようにと大きめの浴室であるため、二人の高校生が入るには十分な大きさである。もっとも二人にとっては久しぶりの姉妹の会話を二人きりでできる方が重要であるらしいが。

残った二人、西住家の夫婦はしばらくぶりに二人きりで大洗の夜の

学園艦に散歩に出ていた。

「……学園艦を練り歩くのは何年振りかしらね」

車椅子を押しながら、しほは呟く。

彼女は戦車道の指導をすることはあるが、それはあくまで一部の社会人チームなど一部の人々に対してだけである。その為、高校のチームである黒森峰でもそうそう彼女が指導に向かうことはなかったのだ。

「……二人で出かけるのがまほが生まれて以来っていうのは覚えているかな」

その彼の言葉にしほはハツとした。

「やっぱり色々和我慢もしていたのかな？」

「そんなこと——」

「学園艦に限らず、もつと行きたい場所もあったんじゃない？」

下手に言い訳しようものなら、逆に傷つけてしまうと考えたのかしほは悩んだ末に正直に「はい」と答えた。

「……意地悪な言い方だったね、ごめん。……でも、ありがとう」

そう言いながら、彼は自分の肩に手を置くように腕を動かし、車椅子のグリップを握るしほの手に自らの手を重ねた。

お互いに久方ぶりの伴侶の手の感触に安心しながら、いつの間にか住宅街に一番近い艦の淵に沿って設置された公園に着いていた。

「この時期でも、やっぱり海沿いが寒いのは変わらないわね」

公園のベンチに彼を座らせながら、しほは車椅子に常備しているひざ掛け用の毛布を彼の肩に掛けてやり、自身もその隣に座る。

「……急にいなくなっでごめんね」

どこか弱々しい声で、彼は呟く。

「……心配しました。あと、怖かったです」

「……うん。僕もすごく怖かった」

二人が怖かったのはお互いに怒られたり、嫌われたりすること——ではない。そういうことを思いつないほどに、この二人は相思相愛なのだから。

二人が恐れたのはこれ以上会えなくなってしまうことだ。

言ってしまうえば、彼は発作一つで簡単に命を落とす。それは数年先のこともかもしれないし、数秒先かもしれない。その事に覚悟がないのではなく、最後に家族が散々の時にそうなってしまうえば後悔をしてみるのが怖いのだ。

「今、声を聞けるのがとつても幸せだと思う」

「ええ」

体格的に小柄な彼の方が、しほの肩に寄りかかるようにする。

「弥栄の家を用意することが貴方の目的だったのかしら？」

「うーん……確かにそれが一番の目的ではあったけど、本当にみほのことも心配だったよ？」

彼は西住と言う立場が、しほ、まほ、みほの本音を言えなくしているのだと考えていたのだ。だから、遠く、西住の家から離れた場所で、自身の作家としての名前である弥栄の表札を彼は使った。

西住と言う名前が意味を持たなくする場所を作るために。

「……髪を切りましたね」

「うん……みほの友達の前御さんが床屋さんで、そこで切ってもらった」

彼の額にかかる前髪を指で整えてやりながら、しほは語りかける。

「しほは少し痩せたかな？」

「いつも痩せている貴方ほどではありません」

座ってお互いにくっついていて側の手を繋ぐ。

「波の音……行けないと思っていた海に二人で来れた」

「ええ……寒くはない？」

「しほが暖かいから大丈夫」

海の音を聞く。水や川の流れる音とは違い、大きくて、それでいて深い音が二人の耳朵を打つ。

「そろそろ帰りますか？」

「もう少しこのまま……」

珍しく我が儘を言う夫に、やれやれと思いつつもしほは、その華奢な身体を抱き寄せてやった。

同じく公園内のちよつと離れた場所

「いい加減行くぞ」

「ちよつと待ってよ麻子！あそこに若いツバメを射止めた大人の女性がいるの！」

「お前……出歯亀は趣味が悪いぞ」

弥栄のお隣の西住さん家

「それで？」

「……何が？」

「とぼけるな。お父様の写真を撮っているだろう」

「……………ナニヲイツテイルノカワカラナイヨオネイチャ
ン」

「ほう……」

「あ、あ、待って！正直に言うから、携帯のファイルは！ファイルだけは！」

ところ変わって榊さんの家

「日中は挨拶できずにすみませんでした」

「いや、かまやしねえよ。相変わらず律儀だな、井手上」

「そういう家ですし」

「お父さん、どなたか来てるの……って、菊ちゃん？」

「あら、久しぶりね、さっちゃん」

「本当に久しぶり！でも今は榊の名前じゃないから『さっちゃん』じゃ

ないわよ」

「結婚して、確か——」

「そう、今はナカジマ姓よ」

花

「……………ふふ」

朝起きて、すぐそばに家族がいるのは幸せなことだと思いながら、その日彼は目を覚ました。

同じ布団で、手を繋いだ体勢で寝ていた西住夫妻。先に起きたのは夫の方であった。思わず、彼は最愛の人に頭を擦りつけ、匂いでマージングをするような事をしてしまう。それを恥ずかしくも思うが、幸せな気分の方が今は優っていた。

それでも、ずっとそうしているわけにはいかないのは彼もわかっていた。最愛の人の体温や香りを感じながら、寝起きの微睡みに身を委ねたい衝動に抗いつつ、彼は一日の始まりとして、ベッドから降りると寝巻きから普段着である着物に着替え始める。

「……………あなた？」

着替えていると普段の凜とした声ではなく、どこか甘い声が彼の耳に入り込んできた。

目が見えなくなつてからの生活が長いと、着替え自体は手馴れたもので、彼は自分だけでそれができる。しかし、時々壁にもたれて休憩しながらの着替えであったため、着替えの最中を見られてしまい今更であるが、彼は気恥かしさを覚えた。

「おはよう、しほ……………少し向こうを向いて……………なんだか気恥ずかしい」

「おはようございます……………なんだか、あの頃みたい」

ぼそりと呟かれたその言葉に、初めて彼女に自身の素肌をさらした時のことを思い出した彼は、ほんのりと朱色に染めていた頬を更に濃い色にした。

「……………ちそうさまでした」

タカシが外泊したため、西住一家と菊代を合わせた五人による朝食。

いつもと違うが、本来であればこれが正しい面子での朝食はお腹以

上に、心を満たすものであった。

「お父さん、お願いがあるのだけど」

朝食の片付けもそこそこに、みほは食後のお茶を飲む彼に声をかけた。

「お願い？」

「うん。実は私たちの戦車チーム……あんこうチームっていうのだけど、そのチームのみんながお父さんに挨拶したいって言ってるの」

中高生になって、本格的な戦車道を始めてからどちらかといえば内向的であったみほが、どこか嬉しそうに自らのチームの事を喋ることを嬉しく思う西住家。

どこかほっこりしながらも、彼は聞くべきことを尋ねていった。

「えっと……学生の輪の中に親である僕が行くのは気不味くないかな？」

「そんなことないよ！逆にみんなお父さんに気を使わせてしまったと思って、お礼したいって言うぐらいだし」

慌ててフォローするぐらいには、みほの友達から憎からず思われている事に安堵を覚える彼。しかし、お互いに気を使うような空間を作るのはどうなのだろうかとも考えるのが彼であった。

「貴方」

「しほさん？」

そんな中、助け舟を出したのが母であるしほであった。

「今日、明日とマネージャーである彼には暇を出したのでしょうか？」

しほの問いかけに、彼は頷く。

自宅作業が主とは言え殆ど休日が無いのはどうかと思った彼は、後からタカシの携帯に休日の追加を言い渡したのだ。

幸いにも、今はしほやまほ、それに加え彼の世話に慣れている菊代もいることから、彼も特に反論することもなく了承するのであった。

「今日の昼間は私たちも全国戦車道大会の予選抽選会があるので、あなたと一緒にはいられません。だから、抽選会が終わり次第解散するみほと一緒にいてくれた方が私も安心できます」

いつもより饒舌に喋るしほの姿に目をパチクリとさせる娘二人と、

何か懐かしがっている菊代。そんな三人のことは気にせず、彼はしほに尋ねてみる。

「抽選会の間、僕は一人になるのかな？」

「菊代」

「私の知り合いと今日会う約束をしているので、良ければ旦那様も一緒に行きませんか？」

しほに呼ばれた菊代はいつもの微笑を浮かべ、そんな提案をしてきた。

「……それこそ僕は場違いなんじゃ？」

「それが、その人は貴方と会ったことがあるらしいですよ？」

「へ？……ちなみにその人の名前は？」

「それは行ってみてのお楽しみということだ」

楽しんでいる口調でそんな事を言ってくる菊代に「敵わない」と思いなながらも、彼はその日の予定を決定した。

そして朝食後、外行きの準備もそこそこに西住一家は出かけていく。

家族の女性陣がそれぞれ、高校の集まりの方に行ったりする中で、菊代に車椅子を押してもらいながら、彼は二人で大洗の駅の周辺を散策していた。

「ここで待ち合わせですか？」

海が近く、磯の香りと少しベタつく風を感じながら、彼は菊代に尋ねた。

「そうです。迎える者が来るらしいのですが……」

そこまで言われて、彼の耳に聞き慣れない音が聞こえてくる。

「これは………車輪？それにしては静かなような……」

「旦那様、それはきつと迎える者ですよ」

「？」

自身の座る車椅子を動かす時の車輪の音に似ているが、それにしてもどこか大きな違いがある音に首を傾げて呟く彼。だが、その彼の言葉に心当たりがあった菊代は、どこか楽しそうに彼に告げた。

「お待たせしました！」

いつの間にやら近くに来ていたらしい、その車輪を動かしていた男性が大きな声でそんなことを言ってきた。

「お久しぶりですね、新三郎さん」

「井手上さんもお変わりなく………あれ？最後に会ったの数年前ですが、全く変わっていないような？」

何か咳く声が聞こえたが、藪をつつく趣味がないため、彼はそれを聞かなかったことにした。

「ところで、そちらのお坊ちゃんはどこ様ですか？」

（……………お坊ちゃん？）

「こちらは私が勤めているお家の旦那様です。百合さんが以前もう一度会いたいと言っていたのを思い出して、ちよつと驚かせようと思つて付いてきてもらったの……………それと彼は私たちよりも年上よ」

いつもの勘違いかと、お坊ちゃん発言をスルーしつつ、菊代が口にした『百合』という名前の人物を自身の記憶から引き出す作業にかかった。

「こ、これは失礼を」

「あ、気にしないでください。自身の見た目のことは理解しているの
で」

挨拶し、握手も交わしたところで、彼は菊代と共に新三郎の引き車に乗り込み、目的地のお家に急ぐのであった。

引き車に乗っている間、彼は普段なかなか感じる事ができない速度を体験し、少し気分が高揚したが、体の事を考えて少しだけ速度を下げてもらったりするのであった。

「到着しました」

新三郎に案内され、彼に車椅子を押ししてもらいながら、和風な屋敷に通される。

井草の香りから、畳の部屋に通されると思い歩かなければならないかと、自身の体に入力しようとする彼。

しかし、その辺りの事は察してくれたのか、板張りの部屋に通され、車椅子でも乗り入れられる部屋に通された。その事に肩透かしをくらった彼であったが、新しくその部屋に入ってきた人物の足音を聞い

て、緩んだ気持ちを引き締め直した。

「お久しぶりね、菊ちゃん」

「急にお邪魔してごめんなさいね、百合ちゃん」

部屋に入ってきたのは、今回の目的の人物であった。

「ええと、そちら、は……………あらっ」

戸惑いから驚きに変化した声に、結局ここまで来る道中に思い出すことができなかった人物に対して申し訳なさも感じつつ、彼はその女性に頭を下げた。

「こんにちは。自分は井手上さんの雇い主で——」

「もしかして、弥栄さん？」

名乗る前にペンネームを言われる。

その事から、本当に面識あったのかと思いつつ、彼は失礼を承知で尋ね返した。

「そうです。今回、井手上さんのお誘いを受けて伺った弥栄縁です……………申し訳ないのですが、以前お会いしたと菊代さんから聞いたのですが、心当たりがないのです。大変失礼なのは承知でお訊きしますが、以前どこでお会いしたのでしょうか？」

「え、あ、そんな。お会いしたといっても、もう随分と昔の話ですし、それに二言三言言葉を交わしたただけで、覚えていないのも無理はないと思います」

彼の言葉に慌てて返答を返す彼女であった。

口早にそこまで言うのと、その慌て様をどこか微笑ましく見ている菊代に彼女は気付く。そのどこか状況を楽しんでいる彼女に、呆れと同様に変わらない旧友に安堵を覚える百合であった。

「んっ、うん……………それでは改めて自己紹介をさせていただきます。華道、五十鈴流家元、五十鈴百合と申します」

(……………五十鈴?)

上の名前がどこか引っかけかり、やはり自身の記憶を漁り始める彼。自身の思考に沈みそうになるが、その前に百合が彼に説明を始めた。

「以前お会いしたというのは、本当にもう十年以上前でして。当時、貴

方は『花』というタイトルで音楽の譜面を残しませんでしたか？」「え？……ええ、まあ。譜面というか、CDのアルバムにですけど」彼は驚いた。百合は自己紹介の時に華道に身を置くと言っていた。その為、同じ芸術といっても音楽という畑違いの、しかも自身が結婚する前の、今ではもう絶版になっているアルバムのタイトルを口にしたのだから。

「当時、若輩だった私は、自身の華の表現に疑問がありました。そんな時にその『花』に収録されている曲を耳にしたのです」

そのアルバムは、彼にとつてもある意味印象が深い作品であった。花というアルバムのトラックにはそれぞれ個別に花の名前が当てられ、その花を表現した曲が収録されているのだ。

当時、微かではあるが見えていた目。その時に見えていた色や形の美しさを、目が見える内に表現したいと考えた彼は、その二つの特徴を併せ持つ花に関心を寄せたのだ。

そして、特徴的な花を一種類ずつ表現していった曲を全部で十一種類まで書き上げたところで、彼の目は物の色を認識することができなくなった。

その為、そのアルバムの事は彼にとっては様々な意味で思い出深いのである。

「耳にしたのは、小さな演奏会でした。ほんの息抜きで、友人の誘いで足を運んだチャリティーコンサート。そこで花の名前の詩のない曲を聞いたのです」

当時の事を思い出している。

それがありありとわかるような表情をする百合。それはどこか夢心地のような表情で、彼女の声音からもそれを窺えた。

「衝撃でした。音だけでここまで生きた花を表現できるのかと」

その声に熱と艶がこもった。

「音と律動が、色を、形を、匂いを、生命を連想させる。当時の自分の華が幼稚に見えるほどの衝撃でした」

過度な賞賛に彼はその場しのぎの笑いを浮かべるしかなかった。

「その時はとても舞い上がっていました、その場で販売していたCD

を購入したときに、ちょうど係員の方がその曲を作った人がいると言葉を漏らしたのを耳にしたのです。そして、無理を言つて貴方と会えるようにしてもらいました」

ここまで語られても、彼は当時の事を思い出せないでいた。

何故なら、覚悟はしていたのに、いざ目が殆ど見えなくなるとこれまで当たり前であつた光景がわからなくなり、その事に大きなショックを受けていたのだから。

「その時はお疲れだったのか、あまりお元気そうではなかつたのですが、握手と挨拶だけはさせていただいたのです」

「……………すみません、当時の事はあまり覚えていなくて」

「いえ、そんな！今日、こうして会えるなんて夢にも思っていなかつたのですから、それだけでも嬉しいですよ」

そこで、この話は一旦切り上げることとなつた。

あまり話し込んでしまうと、今日の訪問のメインである菊代がほつたらかしくなってしまうのだから。

それから、女性は女性同士、男性は男性同士で話し合うことになつた。なつたのだが、彼と新三郎は同性といえど真逆な性質である。

その為、早々に会話に詰まってしまう。

だから、彼は少し焦つて少々突っ込んだ事を尋ねてしまった。

「あの、新三郎さん…………百合さんのお声に憂いみたいなものを感じるのですが、何かあつたのですか？」

尋ねてからしまったと思うも、口に出してからでは後の祭りであつた。

親の心

(ああ……………大洗に来てから色んな経験をするなあ)

現実逃避気味にそんな事を考えている彼は、人生の中でも指折り数えるくらいしか経験のない「脂汗を流す」ということをしていた。

「弥栄さんはどう思いますか?……………私のように音楽ならまだしも戦車道なんていう横道に逸れるのなんて……………」

怒っているような、若しくは悲しんでいるような様子で百合はそう語る。

彼が話題に窮し、咄嗟に尋ねた結果が今の状態である。

百合は語る。

自分には娘がいることを。そして、その娘は偶然にも彼の下の娘と同じ歳らしい。

百合は誇る。

娘には才能があり、五十鈴流を次ぐに相応しい華を生けると。

百合は嘆く。

その娘が、親である自分に黙って戦車道を始めたことを。そして、つい最近戦車道の練習試合を行った日に偶然娘と会い、それを知ることとなったと。

「……………」

ここまで話を聞いた彼は、ぶつちやけ心当たりがありすぎた。

(五十鈴……………五十鈴……………そう言えば、みほの話に出てきた名前の中にはそんな名前があったような)

語るといふよりも、既に愚痴のようになってきた話しを聞き流しながら、彼はぼんやりと娘とのやり取りを思い出す。

(こういう「親」もあるのか)

聞き流す中で、ふとそんな感想が彼の中に生まれる。

これまで親が自身の子供に対してどういう期待を抱くのかを考えたことがなかった彼にとって、この話は人生の中では未知の領域であった。

(僕は……………うん……娘に期待するどころか……色々と娘の期待に答えようと必死だった……かな?文字通り)

「戦車なんてなくなってしまうばいいのに!」

「え?」

自身の思考に浸っている中で、その言葉はしつかりと耳に入った。

呆然とするように声が言葉となって、口から自然ともれる。その声が大きかったのか、彼以外の三人の視線がその声の主に集中する。

「弥栄さん?」

「……………え?……………あ」

気遣わしい声にハツとする。

そして、気持ちを入れ替えると同時に、彼は思い切って口を開く。

「あの、確認なのですが、娘さんが通っているのは大洗高校ですよね?」

「ええ、そうですが……」

「だとすれば、戦車道をするきつかけになったのはうちの娘かもしれない」

「……………はい?」

彼の言葉を咄嗟には理解できなかったのか、百合は間抜けな声を漏らす。

「私の弥栄縁というのはペンネームで、今の苗字は西住です」

そこまで言われて、色々と察したのか、百合の顔は呆然としたものになった。

彼女の中で怒るべきなのか、それとも自身の発言を謝ればいいのかすらわからなくなり、思考停止しているのだ。

そんな彼女の心境を知ってか知らずか、彼は言葉を続ける。

「このことに対して、こちらは謝ることはしません。娘が切っ掛けで直接的な原因であったとしても」

いつもの穏やかな口調ではなく、断言する力強い声と言葉であった。

そして、そこまで言われたことで、意識を切り替えることができたのか、百合は先程までと打って変わって厳しい目を彼に向ける。

「……あくまで、うちの娘に選択の責任があり、そちらには非がないと仰るつもりですか？」

「非……ですか。それは何のですか？」

咎めるような言葉に疑問を持った彼は聞き返す。

「そちらの娘さんが戦車道を始めたことですか？それとも華道を離れたことですか？」

「どちらもです！」

「それは——悪いことなのですか？」

そう切り返され、百合は閉口した。

仮にも、西住という戦車道の大きな流派の人間が、その専門とする分野を離れる事を容認するような発言をしたのだから。

「私は今、大洗の方に下の娘と一緒に家出てきています。それは、娘が一度戦車道から離れたいと願ったからです」

その言葉に信じられないという表情をして、彼女は事の推移を見守っていた菊代に視線を向ける。視線を向けられた彼女は、肯定するように一度頷いた。

「大洗に……戦車道のない高校に来て、他の様々な選択肢がある中で、娘はそれでも戦車道をする、戦車道が好きだと言いました。それは娘が西住だからではなく、娘が選んだからです」

「それは……でも、それでも、そちらの娘は親が望んだ事をしていてはいないですか」

「え？」

そう言われて、彼はキョトンとする。

「……そうか、そういう取り方もできるのか」

ぼそりと呟いてから、彼は少しだけ考える。そして、ある程度考えが纏まってから、もう一度口を開いた。

「百合さん。確かにそう思われるかもしれませんが、僕は二人の娘がどんな道を選ぶとも口を出すつもりはないのですよ。なんせ、僕自身が好き勝手に生きていますから」

彼の言葉に百合は息を飲んだ。

普通であれば、到底信じられない言葉である。あるのだが、それ以

上に信じられない言葉を彼は口にしたのでから。

(自分……勝手?……)

車椅子に座り、自由に歩くこともできない。

光を映さない目で、何かを見ることもできない。

先程から、テーブルに出されているお茶請けに手も付けられないほどに制限されている食事もそうだ。

これだけ不自由な生き方をしておいて、彼はそれでも言い切ったのだ。

自分は好き勝手に生きていると。

「別に同情を誘うために言っているわけじゃないですよ。僕は一人では何もできない。それを理解して、誰かの負担になるのも分かっています、その上で、僕も僕の道を選んだのだから」

彼の言葉に、百合はハツとした。

「僕も娘も結局は自身が望んだ好きな事をしているだけです。百合さんもそうでしょ?」

「……………はい」

「娘さんとどんな話を話したのかは、僕は知りません。ですけど、我が子を選んだ道であるのであれば、それを信じてあげるのが親の責務だと僕は思います」

そう言われて、百合は思い出す。

自身の娘が華道が嫌になったわけではないと言ったことを。

「気休めにしかならないかもしれませんが、貴方にとつて僕の曲が切っ掛けになったように、戦車道が娘さんの変わる切っ掛けになると祈っています」

そこまで言うと、一度彼は頭を下げる。

「無礼な言葉の数々、本当にすみませんでした。自分はこれで失礼します」

頭をあげて、車椅子を動かそうとする。

そして、部屋の出入り口がどちらにあったのか思い出そうとする前に、菊代が彼の車椅子を押し始めた。

「お、お送りしますー!」

背中の方から、大きな声と足音が聞こえてきた。

そのまま、五十鈴家の門の前まで移動すると、付いてきていた新三郎が引き車を取ってくると言い、その場を離れていった。

「菊代さん、貴方は百合さんの方に付いていてあげてください」

「あら？私に丸投げですか？」

「……きつと、百合さんは親として初めて、子供の本心を聞いて混乱しているのだと思います。だから、話しを聞いてくれる人がいるだけでも違うはずです。だからお願いします」

茶化すような彼女の言葉をスルーしつつ、彼は誠心誠意頭を下げる。

その、何事にも真面目な姿勢を見せる彼に、危うさを感じつつも菊代は了承の意を込めて、彼の頭を優しく撫でた。

「頭を上げてください。新三郎さんに貴方の事を頼んでから戻りますから。それと、みほお嬢様にはメールをしておきますので、電話がなったらしっかりと受け取ってくださいね」

その幾つかのやり取りの後、引き車と一緒に戻ってきた新三郎と共にある程度やり取りをした三人はそれぞれ二手に分かれて目的の場所に向かった。

その移動の最中、彼は携帯電話の短縮キーを操作し、ある人物に電話をかけた。

「もしもし母さん？昔の楽譜の中から探して欲しい物があるのだけど」

縁

唐突ではあるが、彼は甘味が好きだ。

普段からの食事制限からストレスを全く感じないということはない。生まれた頃から、そういった離乳食に近いものしか食べてこなかったため、一般的な病人と比べ食事に対するストレスが多少なりとも少ないとは言え、似たようなものしか食べられないと言うのは十分にストレスとなった。

その為、少量ではあるが時折食べることでできる水分を多く含んだ果物や、脂肪分が少なめの菓子類を彼が嗜好品として好きになるのは、人間として当たり前の帰結であった。

そんな彼は今、予定通り娘とその友人と合流して——いなかった。

「ほら、エニーシャー！このブリヌイも美味しいのよ！」

今彼は、自身の身長よりも少し低い女の子から、ロシアのクレープのようなお菓子を手渡しで受け取っていた。

「カチューシャちゃん。確かに美味しいけど、僕はそんなに食べるこ
とができないんだ。ごめんね？」

「あ、え？···そうなの？」

現在彼は、ロシア料理を扱う飲食店にいた。

事の発端は、娘たちを待っている途中にかかってきた電話である。

その電話は彼の待ち人であるみほからであった。

色々と彼の体調を聞いたりしたあと、みほはあることを切り出した。それは、黒森峰の黙って出て行った戦車道のメンバーに挨拶をしたいということ。

それを聞いたとき、彼は当初その言葉の意味をうまく理解できなかった。

だが、その言葉の理解が追いつくと同時に色々な懸念が彼の中に浮かび上がり始める。

喉元まで出かかる言葉。

その纏まっついていない考えを口にする前にみほは言う。

「お父さんやお母さん、お姉ちゃんも勇気を出してここまで来てくれたから、私も勇気を出してみるね」

その娘の言葉に、頭の中が真っ白になる。それと同時に、心配しすぎていた自分が気恥ずかしくなる。

それを誤魔化すように、彼は親として一言返事をした。

「行っておいで」

言葉少ないエールであるが、それは受け手次第で大きくも小さくもなる応援であった。

その後、合流するまでもう少し待っていて欲しいことを伝えられ、彼は予定よりも長い時間待つことになったのだ。

急にできた空き時間。その間どうしようかと惚けていると、自然とその場の音が彼の耳に入ってくる。

「……………」

彼が今いるのは、様々なウインドウショップが並ぶショッピングモールの休憩所のような場所である。

そこには休日なため、大人はもちろん子供の声や足音、そして笑い声や泣き声といった様々な音が溢れていた。

彼は車椅子が邪魔にならないようにと、壁沿いにあるベンチに腰を下ろし、その車体をベンチの横に停めていた。送ってもらった新三郎に日当たりの良い場所まで連れてきてもらったため、長時間待つことになっても大丈夫と彼は根拠の薄い確信を抱く。

その心地よい陽気と、様々な絡み合う音から彼が鼻歌を口遊むのにそんなに時間を必要としなかった。

「……………」

同じベンチに座る子供が、地面に着かない足をぶらぶらと前後に振っている。

それを主軸にリズムをとっていく。

最初は幼い子供が好きそうなアップテンポの曲だったのが、緩やかにペースが落ちていく。

穏やかな曲調となり、最終的には子守唄のようになる。

そして、そんな中、彼の膝にぽてりと軽い感触が降ってくる。
「ん？」

反射的に疑問の声を漏らしたため、曲がストップしてしまう。そこで気づく。

「どうやら、隣に座っていた子供が麗らかな日差しと、耳心地の良い歌で眠ってしまったようだ。その証拠に、膝に乗った感触は人の頭で、そこから寝息が聞こえていた。」

その休憩所にいた赤ん坊や泣いていた子供が、彼が歌い始めてから少しして穏やかな寝息を立て始めたことを彼は知る由もなかった。

「うん……」

歌が止んだことが不満なのか、寝苦しそうな声が自身の膝の上から聞こえる。

自分の鼻歌で眠ってしまったのであれば、もう少し聞かせてあげようと思った彼は、再びリズムを刻み始める。

だがそれは、先ほどの曲ではなかった。

(懐かしい)

その曲は、西住の家の縁側で二人の娘に聞かせた子守唄。

当時を思い出すように、彼は膝の上の小さな頭を撫でてやる。その時間を忘れてしまいそうな感覚を覚えながら、数分という曲の終わりはやってきた。

「……………ふう」

「あの、失礼ですが」

「えっ？はい」

曲が終わり、一息を付いた彼にタイミングよく話しかける女性がいる。
「た。」

随分とタイミングの良い声掛けに彼は反射的に返事をする。

「その、膝の上で寝息を立てているのは、自分を待っていたのです。どうやらご迷惑だったようで。引き取ります」

簡潔にハキハキと物事を言うその女性に、彼はどこか自身の妻を連想させられた。

「いや、迷惑ではありませんよ？心地よさそうに子守唄を聞いていて

くれたみたいですし」

「——ん、うん？……のんなあ？」

膝の上で眠っていた小さな眠り姫が目を覚ます。

寝ぼけているのか、見た目通り普段からどこか舌っ足らずなその声
が、輪をかけてホニヤリと蕩けている。

「カチューシャ、お待たせして申し訳ありません。用事の全てが終わ
りましたので、仰っていた食事のお店に行きましょう」

「んう……やあ」

何故か、彼の着物の裾を握り愚図り始める女の子。

女性からカチューシャと呼ばれたその子は、未だに寝ぼけているら
しい。

「おうたきくのう」

「お歌なら私が歌ってあげますから」

「やあ、このうたがいいの」

『この歌』と言った時に、裾を掴む力が強くなる。そこから察する
に、どうやらこのカチューシャはよほど彼の子守唄がお気に召したら
しい。

「カチューシャ、それではこの方の迷惑に——」

「あの、よければその店まで送りますよ？」

咄嗟にそんな言葉が彼の口から出ていた。

「は？いえ、しかし」

「ちようど、待ち時間が伸びましたので、どうやって時間を潰そうかと
思っていたところなので。あ……でも、こんな身体なのでできれば
ここに戻る時に誘導してもらえればありがたいのですが」

どこか申し訳なさそうな彼の態度にその女性——ノンナは目
をパチクリとさせた。

そんなこんなな出来事の後、彼は小柄な体に対して少し大型な車椅
子にカチューシャを膝に乗せるようにして、冒頭のロシア料理の店ま
で来たのであった。

ちなみに、店に着く頃になって二度寝から目覚めたカチューシャは
自身の寝ぼけていた時の事を覚えていなかったらしく、彼の存在に到

く驚いていた。

店に行く道中と、到着してからもお互いの自己紹介をしていた。

その際に、カチューシャとノンナの二人が戦車道関係でここに来て
いることを知った彼は、自身の本名を出すことを渋り、ペンネームの
方の『弥栄縁』と名乗っていた。

ちなみに、カチューシャが高校生であることを知っても驚かなかつ
た彼にノンナは少しだけ驚いていたりする。

「……………そろそろ戻らないといけないので、申し訳ないのですが誘
導をお願いできませんか？」

「え？エニーシャ、行っちゃうの？」

店員にトイレに誘導してもらった後、その帰りにこっそり会計を済
ませた彼はそう切り出した。

その彼の申し出に、先程までの元気はどこへやら、カチューシャは
不安そうな声をあげた。

「ごめんね、さっきも言ったけれど、僕を待っている人がいるからね。
また今度会おうね」

そう言つて、普段からあまり使わない名刺ケースから名刺を出して
渡してあげる。

「縁つて名前には、意味があるんだ」

「意味？」

「弥栄は栄える、縁はつながりつて意味。人と人との縁が豊かなもの
になることを祈った名前なんだ。だから、カチューシャちゃんが僕と
の縁を願ってくれるなら、このつながりは再開をもたらしてくれる
よ」

「ふ、ふん！……………わ、私は気にしないけど、エニーシャが寂しがると可
哀想だから祈つててあげるわ！」

「うん。どうもありがとう」

微笑ましくその光景を見ているノンナや店員、そして他のお客の存
在をカチューシャが気づく数秒前のやりとりである。

店に行くまでの道中

「そう言えば、ノンナさん」

「はい？」

「貴女が来る前に、僕たちの周りに不審者はいませんでしたか？」

「不審者……ですか」

「ええ。何かを切る音が聞こえたのですが、あれってカメラのシャッター音だったと思うので」

「……………」

「ノンナさん？」

「……………いえ、心当たりはありませんね」

「?そうですか」

奇な物乙な物

家族会議とはどんな時に行うものであるのだろうか？

例えば、夫や妻が生活について重要な決定を行う時。

例えば、子供の進学先や、素行について無視できない話題を相談する時。

例えば、家族に自身の決意した事を告げる時。

例えば――

「第一回、西住家家族会議を始める。議題は、父様にかけられた嫌疑。浮気について」

「お姉ちゃん？どこから沸いてきたの？」

家族内での不義や不和について。

戦車喫茶ルクレールの一角で始まった何かを、当事者である彼はどこか他人事のように聞き流していた。

(さつき、食べた甘いものがお腹にまだ残ってるな……ここで、甘いものは控えようか)

――否、本人的には完璧に他人事と認識しているようだ。

当の本人は、ここに来る前に食べた物がまだ消化できていないお腹を擦り、店員に頼んで用意してもらった、ぬるま湯で口を湿らせていたりする。

そもそも何故こんな会議が始まったのか。

それは当初の予定から大幅に遅れながらも合流した彼と、みほが率いるあんこうさんチームの面々が目的地である喫茶店で自己紹介をした後に起きた。

聞き覚えのある名前と、初めて聞く声による出会いにそれぞれ挨拶を送る彼。

特に秋山夫妻の娘である優花里にはいつもお世話になっていますと、深々と頭まで下げる。自分たちよりも遥かに年上の人間、しかも友人の親からそういった畏まられる態度を取られ、あんこうさんチームの面々もどこか畏まった返事を返すのであった。

そんな中、いつもの様子とは少し違う一人の少女がいた。

「……………うーん？」

「……………どうした沙織？」

「ねえ、麻子。みぽりんのお父さんどこかで見たことない？」

それは、合流した時から思案顔を浮かべ始めた武部沙織であった。彼女に尋ねたつもりが、逆に尋ねられた冷泉麻子は一度眉をひそめ、改めて車椅子に座った彼を改めて見つめてみる。

線が細く、スラリとした印象の体はヘタに触れば壊れてしまうガラス細工を連想させる。そして、自身と同じか若しくは小さいくらい的身長。一本一本が細い髪は、先ほど会った黒森峰にいるみほの姉よりもみほの髪色に近い薄い茶髪が混じった黒髪であった。

「……………いや、この場合、隊長が彼に似ているというのか？」

どこか全体的にはにやりとした顔つきが、自身のチームの隊長であるみほに似ていると感じた麻子はそう言葉を零した。

だが、いくら外見を観察しても麻子は彼を初見であると断定する。自身の記憶力に自負がある麻子は小さく首を横に振り、沙織に心当たりはないと意思表示を送った。

「うーん。絶対見たことあるんだけどなあ……………うん？麻子……………男の人……………車椅子……………ああ！大人の女性にゲットされてたあの時の若いツバメ!!」

「その時の事を詳しく聞かせてもらおうか？」

「た、隊長？」

記憶のサルベージに成功した沙織は、喫茶店の中で、そんな事を大声で宣ったのであった。

そして、ちょうど来店してきたのか、いつの間にかテーブルの横に立っていたまほと、黒森峰の現副隊長である逸見エリカがこのお茶会に参戦した瞬間でもあった。

そんなこんなで、喫茶店のワンテーブルがまるで裁判所のようになったのは、そういつた経緯があったがためであり、冒頭の家族会議に繋がるのである。

「……………隊長がこうなるのがわかってたから、後輩の皆から情報集めて、

おじ様に会わせないように気をつけていたのに……いや、他の皆に見られなかっただけでも良しとするか？でも、大会に差し支えないわよね？」

今現在、黒森峰の二人に挟まれている彼の耳にそんな独り言が聞こえる。声の主は、まほと反対側に座る逸見エリカであった。

娘の暴走グセをある程度理解している分申し訳ない気分になりつつ、彼は取り敢えず彼女には優しくしようと思う。それが、余計に娘からの負担を増やすことになる要素なのだが、今の彼はそこまで気が回っていない。

「武部沙織……と言ったか？それで、いつ父様が女性と逢引をしているのを見たのか詳しく話してくれ」

「え、ええ？」

困惑しつつも訥々と、沙織は昨晚見た風景をそのまま伝える。学園艦の淵に沿うようにしてある公園のベンチに座る彼と、大人の女性をそのまま形にしたような人と肩を寄せ合うようにして一緒にいたことを。

「……それってしほさんだよ？」

急遽開催された家族会議は、開始五分で閉幕を迎えた。

「えっと、改めて自己紹介をしておこうか。みほの父です」

そう言つてぺこりと頭を下げる彼は、この面子の中で最年長として微妙な空気が流れているのを切り替えるためにそう切り出した。

「先ほど顔を合わせたか、みほの姉の西住まほだ。妹が世話になってる」

「……………逸見エリカよ」

二人はこの場で、黒森峰と名乗らなかつた。それはこの場に他校であるということや、先刻みほが筋を通しに来た話題を持ち込まない事を遠まわしに宣言するのの意味していた。

「こちらこそ、いつもみほさんにはお世話になっています。私は五十鈴華と申します」

五十鈴という苗字に反応してしまいそうになるのを堪えつつ、彼は一息つく。

なんだかんだで、色々濃い一日を過ごした彼は落ち着き、緊張の糸が切れたのか、気怠さを感じる疲れをハッキリと自覚した。その為、うつらうつらしていると、自然と頭が傾いていく。(さっきの……カチューシャちゃんも……こんな……感じだったのかな?)
そんな事を考えつつ、ゆつくりとぬるま湯に沈んでいくような感覚を最後に、彼は寝息を立て始めた。

頭を傾け方にまほがいた場合：グッドエンドルート

「ね、ねえ、みぽりん？お姉さんの顔が無表情なのに赤いよ？大丈夫？」

「……………」

「あ、鼻押さえた。本当に大丈夫？……………みぽりん？携帯出してどうしたの？」

頭を傾けた方にエリカがいた場合：ルナティックルート（エリカの胃が）

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あ、あの、隊長？みほ？」

「ナニカイウコトデモ？」

(胃が……胃がキリキリする……………ああ、ハンバーグ食べたい)

頭が前（机）の方に傾いた場合：トウルーエンド

「うん……………（うつらうつら）」

ガンツ!!

「……………あ……………」

「うあつ！つうくくく（額抑えてプルプル）」
カシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤ
.....

番外編：超展開F G O編

未来というのは不透明だ。

歩き始めるのが他の赤ん坊よりも遅かった人間が、世界レベルのラッナーになることもある。

子供の頃から勉強が嫌いな人が、世紀の大発見をするかもしれない。

そして、人よりも劣るものが多い人でも、成し遂げられる何かがある。

その可能性を否定することができない存在は普通であれば存在しない。

だが、この世界ではそれが確定してしまう。

人間の滅亡という未来が。

——生き残りのマスター：二名——

人理継続保障機関カルデア。

人の未来を閉さない為のその組織は、裏切り者の存在により、活動を開始すると同時に大きな危機を迎えていた。

その活動を行う魔術師たちは、裏切り者の破壊工作によりその殆どが死に絶えた。

だが、そんな中にも生存者はいた。

カルデアのメンバーであり、医療部門のトップ兼代表代理ロマン・アーキマンとその他の職員。

カルデアが呼び出した人類史に名を残す『英雄』であり『英霊』でもあるレオナルド・ダ・ヴィンチ。

元々マスター候補でありながら、事故によりデミ・サーヴァントとなったマッシュ・キリエライト。

彼女のマスターであり一般公募の中から選ばれた限りなく凡才に近い魔術師、藤丸立香。

そして、本来であれば一般人であるが、その華奢な身体では考えられないほどの魔術回路と特性、そしてとある『起源』を併せ持つがゆえにカルデア直々にスカウトを受けた彼が生き残っていた。

——初召喚——

星空、若しくは宇宙を連想させるその空間には、ある魔法陣が設置されていた。

それは様々な魔術礼装や、英霊を召喚するためのものである。

今その場には、自前の車椅子に座るその男性が一人だけいたのであった。

『聞こえますか？ミスターヤサカ。貴方にはこれから人類史に名を残す偉人——最高峰の使い魔にしてゴーストライナー、サーヴァントを召喚してもらいます』

「はい」

部屋には彼の姿しかないが、部屋に設置されたスピーカーからはロマン・アーキマン——通称、ドクターロマンの声が聞こえてくる。

その彼の指示通り、彼は部屋に入る前に持たされた金色の札を魔法陣の中央に安置する。

すると、それから数瞬の間を置き、部屋全体が鳴動を始めた。

「つう——」

それと同時に身体の芯が蠢くような不快感と痛みが、彼の身体を蝕み始める。

その痛みとともに、自身が何かにつながる感覚を覚えた瞬間、それは姿を現した。

「影の国より罷り越した、スカサハだ。——マスターと呼ばばいいのか？お主………それにしても弱々しい体躯であるな」

現れたのは、一国の女王であり、死ぬことのできない戦士であった。

湯気と共に、花の甘い香りが立ち込める空間。

普段は体を拭くだけで済ませている彼にとつては、全くといっていいほどの未体験の領域。大衆浴場ほど広い皇帝専用の風呂場に彼は連れてこられていた。

「……すごい香りです。咽せそうなほど……それにすごく暖かい」

「ふむ……弱視であれば、この荘厳な雰囲気は味わえぬか……ひとつ損をしたな、マスター」

自身のマスターである彼を両腕抱えた体勢。所謂お姫様だっこを自らのサーヴァントであるスカサハにしてもらい、彼はお風呂に入ろうとしていた。

「いつもすみません。戦う時も足を引つ張つてしまっていますし」

湯船の横に座り、かけ湯をしてもらいながら彼は申し訳なさそうに口を開く。

しかし、その彼の言葉に彼女はどこか呆れたような溜息を吐いた。「どの口が言うのだ、我がマスターよ？ 貴様の探知に関する感覚は既に常軌を逸しているぞ。リツカやマシユもお前の存在に感謝をしている」

お互いの洗髪と洗顔、そして体も綺麗にすると母親が赤ん坊を抱くようにしながら二人は湯船に浸かる。

「……………僕の戦う理由が復讐に近いものでも、あの子達は僕に感謝してくれるのでしょうか？」

「……………」

ピチョンと、髪から滴る雫が湯船に波紋を広げた。

「あの街……燃える都市、冬木でアイツが、レフ・ライノールが、僕の家族をつ」

言葉に力がこもる。それに合わせ、彼は自分で自分の二の腕を抑えるように掴んでいた。

「泣いて、生きたいと言った二人を、二人だけでも逃がそうとしたあの人を、アイツは笑いながら、楽しみながら、手にかけてつ」

再び雫が落ちる。今度は先ほどよりも大きくて、そして冷たい雫であつた。

「どうして……どうして……あんな……」

「今はゆっくりと休め。少なくとも、その小さな胸に抱く黒い感情も、それを悲しく思える魂も、マスターであるお前自身の優しさ故だ。それを誇れ。生き抜くための糧にしろ。取り戻せる未来は確かにそこにあるはずだ」

高揚した精神を安定させるために彼の額に使い捨てのルーンを刻む。すると弱視のはずなのに、感情に呼応するように開かれていた瞼が落ちていく。

やがて、寝息を立て始める彼の瞼からはしかし、薄く細い涙が流れ続けていた。

「……………もう出てきても良いぞ」

スカサハは体勢を変えずに、そう言葉を発する。

そうすると、大きな湯船の中央に鎮座するオブジェの裏から、スカサハと同じく主を持つサーヴァントであるマシユと、この特異点の存在する世界の住人であり皇帝であるネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクスの二人が姿を見せた。

「スカサハさん……その弥栄さんは？」

「今は眠っている。どうやら、今まで殆ど気を張り詰めた状態だったらしい。ルーンを刻んだとはいえ、ここまで深い眠りにつくとはな」
マシユが恐る恐る尋ねると、スカサハはやはりどこか呆れたような言葉を返すのであつた。その返答を受けてから、何を話し出せばいいのか分からないマシユは言葉に詰まる。

そして、少しの沈黙の後、それを破つたのはネロであつた。

「……………この者は、先の宴で皆を魅了するほどの調べを奏でたというのに、これほどの闇を抱えているのか？この小さな身体に」

赤き皇帝は憂う。

小さな身体に、復讐という火を灯すその哀しき人間に。

民を愛すが故に、何よりも愛に飢えた皇帝は嘆く。

その愛という感情を、憎しみの原料にしてしまった男を。

「マシユ、皇帝ネロ。お前たちは我がマスターを憂うか？恐るか？それとも憐れむか？」

「そんな……そんなことできません。だって、大切なものを亡くして悲しむことは間違っていますし、それに復讐といっても彼は家族を取り戻すために戦っているのです。それをそんな感情を抱くわけが――」

「だが、取り戻すために犠牲を生むことをこのマスターは傲慢ながらも憂いている」

「――犠牲？それに傲慢というのは……」

マシユはスカサハの言葉を理解できなかった。

元々存在する正しい歴史を、今を、未来を取り戻すということのどこに犠牲がでるのか。そして、何をもってしてこの心優しきマスターが傲慢だというのか。

「人理を修復すると言うのが、過去、現在、未来を正しいものに戻すということ。ならば、今現在カルデアが調査している特異点とはなぜ生まれたのか」

まるで物語を詠うようにスカサハ語る。その今更の内容にマシユは戸惑いながらも答える。

「それは、何者かの介入が時代を歪め、て――」

既に解りきった答えを口にしていくマシユの声が尻すぼみになる。それだけで十分であったのか、スカサハは頷きを返すと同時に先の言葉の答え合わせを口にした。

「マスターは取り戻すために犠牲となるその元凶にすら、悲しみを覚えてる。取り戻すこと、失うことはこの者の負担になっていないとは言わんが、自らの仇ですら憂ってしまうマスターの愚かな優しさを傲慢と言わずに何という？」

「でもっ、でも、これまでの探索では――」

「犠牲を出すことを黙認していたことか？それは簡単なことだ。コイツの中の優先順位の問題だ」

どこかつまらなそうに彼女は語る。

「業腹な話かもしれないが、今日の前で戦っている相手に自分で手を

降さなければ、次にそれをしなければならぬのはマシユ……お前やもう一人のマスターであるリツカだ」

「え？」

「我がマスターは、このようなナリでも一人の父親だ。であるのであれば、子供に手を汚させたくはないのだろうさ」

その事実はひどく優しく、とても残酷であった。

——封鎖終局四海 オケアノス——

人生初というわけではないが、嗅ぎなれない磯の香りと、三半規管に訴えかけてくる不安定で不規則な揺れ。それらを縛られ、座った状態で体験している彼は、身の危険を感じていた。

とは言って、揺れの原因が木造の船でありそれに伴う船酔いの所為とか、慣れない潮風が体に悪いとか、きつく縛られている所為で血の巡りが悪いとか、そういった直接的なものではない。

「デュフフのフ、拙僧、おねシヨタつていいと思うでござるよ。どう思うでござるか？エターナルシヨタ殿？」

どちらかという、彼が感じているのは身の危険ではなく貞操の危機であった。

今の時点で、ちやつかり「誘拐」された彼が無事なのは、流石に見た目子供の男を小汚いオッサンが色々としてしまうことに危機感を覚えた、二人でひと組の凸凹サーヴァントの頑張りがあった事を明記しておく。

——北米神話大戦 イ・プルーリバス・ウナム——

スモッグの存在により、体調を崩してしまい途中退場となったロンドンの特異点を超え、ここ北米で彼は再び危機に瀕していた。

「さあ、貴方の悪い部分を教えてください。問診は基本です。自己申

告の部分、そしてこちら側が悪いと見受けられる部分を物理的に処置します。大丈夫、貴方のことは死んでも直しますから」

………主に味方になった鋼鉄の天使の存在によって。

過剰な介護という名のナニカを受けながらも、彼は進む。もうひと組のマスターたちと、自身の相方であるスカサハと因縁の相手に。

——神聖円卓領域キヤメロット——

ドクターロマン曰く、『誰かしらの介入』により、何故かレイシフト先が一人だけずれてしまい、再び孤立してしまう彼。

そんな彼のレイシフト先は何と一国の王の寝室であった。

「何者だ？どのような要件でここに来た」

凜とした高潔な声が部屋を走る。

その声の持ち主を見ることができないことを惜しく感じながらも、彼はそちらに体を向ける。

普段使っている車椅子がないため、ゆっくりではあるが彼にとって是最速の動きで着物を整え、声のした方に正座する。

そして、殆ど見えず、普段は閉じている瞳を顕にした状態で彼は告げた。

「このような見苦しい姿で申し訳ございません。私はカルデアという組織に所属する者です。私は身体と目が不自由な為、度々失礼な事をしてしまうかもしれませんが、ご容赦の程を」

そう言つて頭を下げる。その所作は自身を下に見せる行為であるが、どこか気品があり、相對する相手を尊敬するが故の上品さが窺えた。

それが彼と獅子王との出会い。

獅子王にとって、唯一人間性を吐露できる相手を得た瞬間でもあった。

彼はカルデアを訪れるまでは音楽の仕事をしていた。

作曲をすることもあれば、直接歌うことも、弦楽器を奏でることもある。

そんな彼がバビロニアの王に、そういった仕事を振られるのは当然のことであった。

「貴方、人間のくせにいい音を生み出すのね？」

そんな神でさえ一目置かれる王が認めた音楽家を、この時代の神が見逃すか？ 答えは否である。

彼は詠う。

生きるために、心を震わせる。

それは自身の心であり、聞き手の心である。

彼は謳う。

祈るために、送るために。

それは手向けであり、生命を想う誠実さである。

彼は謳う。

望むために、貫き通す。

それは自身の願いがあるがゆえに。

「……………さようなら」

今はもう映すことができなくなってしまった眼から雫を落としながら、彼はこの世界で犠牲となった多くの命がせめても安らかであると望み、そして懺悔するようにその言葉を口にした。

——そして…………——

「スカサハさん、アンさん、メアリーさん、アルトリアさん。令呪を持って命じます。僕の家族を新しいマスターとして、僕との契約を破棄してください」

レフ・ライノールは保険をかけていた。

小さな歪が、自身の計画を破綻させるものになるのではないかということを。

その為、冬木で手にかけてと見せかけ彼の家族を、ソロモン——
—否、ゲーティアの力を借り、その魂を確保していたのだ。その魂を、新しい肉体に入れることで彼にとつてのトラウマを刺激し、脅迫のため材料とするために。

そして、そのカードを最後の戦いで切る。カルデアのマスター同士で潰し合いをさせるための人質として。

だが、彼は自身の身を差し出しつつ、これまでの特異点での経験で信用以上の関係を築いたサーヴァントたちに願いを託す。

それは、自身の三人の家族との再契約。

それをする事で、自身の家族は最高の守りを手に入れたことになる。

——彼自身の未来を犠牲にして——

人間誰しも都合というものがある。

それはプライベートなものであったり、仕事のことであつたりと様々だ。そして、戦車道の家元ともなれば、仕事の時間が一般的な職業の人間よりも多くなってしまう。

その為、弥栄の家に泊まっているしほとまほは、全国戦車道大会の予選抽選会が終われば、実家の方に帰らなければならないのは当然のことであつた。

「ねえ、みほ。しほさんとまほと菊代さんが帰る前に、何か喜ぶことをしてあげたいのだけど、何がいいと思う？」

色々と濃密な一日の帰り道。

それぞれの家に帰つた大洗のメンバーや、一度黒森峰学園の集まりの方に帰らなければならないまほやエリカと別れ、みほと二人きりになつた彼はそう尋ねた。

「お母さんたちが喜びそうなこと？」

問われたみほは首を捻りながら車椅子を押す。

普段であれば、何か考えながら歩いていけば道端の看板なり、電柱なりに顔面から突っ込んでいくみほであるが、車椅子を押しているときは流石に前方不注意になることはなかった。

「う〜ん……………皆、お父さんと一緒にいるだけで嬉しいと思うけど……………」

「そうかな？」

瞬間的に思い浮かんだ、『一緒に西住の方に帰る』という考えを脳内で蹴飛ばしながら彼女は当たり障りのない意見を口にする。

だが、それで納得をするかしないかは別である。

その為、二人仲良く首を捻りながら帰路を進んでいく。そして、大洗のあるホームセンター前を横切ったときに、みほが口を開いた。

「あ。お父さん。今ホームセンターの前にいるんだけど、ここで皆と買った物したの。その時色々可愛いものもあつたからそれをプレゼン

トしたらどうかかな？」

「……商品の見た目はみほに選んでもらってもいいかな？意見はしっかり出すから」

そうして二人は親子仲良くそのホームセンターに入っていく。そこで見つけた商品がこの後、ひと騒ぎ起こすことも知らずに。

そんなこんなで数十分後。買い物を終えた二人は自宅の扉の前にいた。

みほの携帯には、既にしほが帰ってきている事を知らせるメールが届いており、在宅を把握した二人は、買ってきた品物の準備と仕込みの為に少しだけ扉の前で時間を取られる。

一方で、しほは予定よりも早く終わった会合から戻ると、大きく空いてしまった時間を夕食の準備のために使っていた。

「……しばらくしていなくてもできるものですね」
ポツリとそんなことを呟く。

結婚してから自らの夫のために食事作りに勤しんでいた時期はあったものの、彼の食事の用意を西住家のお手伝いが用意できるようになってからしばらく料理をしていなかったしほ。

だが、一度覚えこませた経験というのはちよつとやさつとでは衰えないらしく、彼女の調理の手際は淀みなく、そして無駄もほとんどなかった。

キャベツ、人参、馬鈴薯、それとベーコンとソーセージを一口大に切る。少量の油を引いた鍋に潰したんにくを入れ、香りが立ってから肉類を投入。肉から油が出ると、次に馬鈴薯と人参を入れ、馬鈴薯の表面をしつかりと油でコーティングしてからキャベツを更に投入。しばらく炒め、キャベツから水分が出始めたら、材料がひたひたになるぐらいのお湯を入れ、塩で薄味をつける。

それからしばらく煮込み、ある程度のアクを取りつつ、馬鈴薯と人参に火が通ったら火を止め、一口大に切ったトマトを入れる。

こうして、夕食の一品であるポトフが完成する。あとは鍋の保温で、トマトにも火が通るのを待つだけであった。

しほやまほが所属する、あるいはしていた黒森峰はドイツの影響を

強く受けている学園艦である。

なので、ソーセージや馬鈴薯が食べ慣れている食材の代表ともいえる。だが、彼が口にするには少し重たい料理が多いため、今回は同じ材料を使ったフランス料理であるポトフを作ることになったのであった。

「味は薄味。物足りなければ個人で塩か胡椒を……」

今晚のテーブルに並ぶ皿を思い浮かべつつ、彼女は次の一品を作ろうと冷蔵庫を開けようとする。

だが、その扉を開ける前に玄関の扉が開く音が聞こえてくる。

「まほにしては早い。なら、みほとあの人ね」

車椅子のタイヤを拭いているのか、少し間を空けてから二人はリビングに入ってきた。

「二人共、戻ったのならまずは手洗いとう、がい……」

帰ってきた二人に視線を向けると、言っていたセリフが途中で途切れた。

そこにいるのは、朝と同じ格好の夫と娘の姿。だが、全く同じではなく追加された要素があったのだ。

その追加要素は二人の頭頂部にあった。もっと具体的に言うのであれば獣耳である猫耳が付いたカチューシャが乗っかっているのだ。

「……………」

空いた口が塞がらない、とまではいかないが呆然とこれはどういうことかという意味を込めて、夫の後ろで満足そうな顔をしているわが子へと視線を送る。

その視線に気づいたみほはそれはそれは綺麗な笑顔とサムズアップを返した。

「……………」

その笑顔に何が込められていたのかは、残念ながらしほには汲み取ることができなかった。だが、その時、やることは決まっていた。

しほはよくやったと言わんばかりに、力強く頷きを返したのであった。

「」

番外編：ボコ

とある日の夜。熊本にある西住邸にて、珍しく家族の四人は一家団欒を過ごしていた。

『やってやぐる♪やってやぐる♪』

炬燵とテレビの置かれた部屋。

その四角い炬燵の一辺ずつに、それぞれは座り各々のやりたいことをしている。

炬燵のテーブル部分を占領しているのは、主に父と母である二人で、机の上には『世界の戦車名鑑』と銘打たれた分厚く大きな本と、今の時代では既に珍しくなってきたカセットテープ用のポータブルプレイヤー。そしてその横に幾つか積まれたカセットテープケースがテーブルの大半を占拠しており、申し訳程度にみかんを入れた籠が季節感を醸し出していた。

一方、娘である二人はこの部屋に設置されたテレビの方に視線を向けていた。

机の上の占有権を譲っている代わりに、この部屋唯一の映像機器であるテレビを二人が使用しているのはある意味でバランスの取れた光景とも言えた。

「……………何度も見てもこれの魅力はよくわかりませんね」

読んでいた本がひと段落したのか、本から視線を外したしほはテレビ画面に映る包帯まみれのクマに対してそんな感想を漏らした。

ふと、二人の娘に視線を向けると、次女は目をキラキラさせながら画面を食い入るように見ているのに対し、長女の方は時折首を傾げるしぐさをしていた。

その光景に、「ああ、理解できないのは私だけではなかったか」と、特に重要ではない安堵感を覚えるしほであった。

「ねえ、あなた」

「——ん？どうしたの？」

二人の視聴を邪魔しないように、これまでイヤホンで音楽を聴いて

いた夫の着物の裾をチョイチョイと引つ張り、声をかける。

小声で話しかけたことを察してくれたのか、夫である彼も娘二人の邪魔にならないように、イヤホンを外しながら小さい声で返事をした。

「どうしてあの子が……みほがあのかマを好きなのか理解できますか？」

「へ？」

「？」

その妻からの質問に間抜けな声が漏れる。

その事にしほは疑問を抱いた。何故ならその声は質問を理解できないとか、質問の答えが分からないとかではなく、*「どうしてそれをしほが知らないのかが分からない」*といったニュアンスが含まれている事を察したからだ。

「えっと……みほがボコを好きになったのはしほさんが原因だよ？」

「へ？」

今度はしほが間抜けな声を漏らす番であった。

事は十年以上前、みほがまだまだやんちゃで幼かった頃の話にまで遡る。

産休と育休を使い果たし、休んでいた分を取り戻すように仕事をしていた当時のしほは、よく出張で県外に行っており、娘の世話をお手伝いである菊代や夫に任せきりになっていた時期があった。

そして、娘になかなか会えない分、何かお土産を買って帰ろうとしていたしほは、その時に偶々見つけたぬいぐるみの専門店に入ったのだ。

「偶にはこういう物も良いでしょう」

普段の彼女であれば、お土産で買うとすれば戦車道関連のものか、もしくはお菓子や名産品を選ぶようにしていた。しかし、彼女もまだまだ幼い二人に年相応なものを買ってあげようとその時は思ったのだ。

そしてそれぞれにクマとトラのデフォルメされたぬいぐるみを購入し、プレゼントする。どちらがどちらかはお察しの通りである。ち

なみにそのチヨイスを見た菊代が苦笑いをしていたのは余談である。そのしほからしては珍しいプレゼントを、二人はいたく気に入った。

まほは貰ったトラのぬいぐるみを部屋に大切に保管し、時々手入れもお手伝いさんに教えて貰いながら自分で行うほどである。

一方みほは気に入ったものを手放したくないのか、四六時中肌身離さずクマのぬいぐるみを持ち続けた。それは食事の時も外に遊びに行くときにもだ。

もちろん、ぬいぐるみはそこまで頑丈にはできてはいない。その為、みほのやんちゃに付き合っていけばどうなるのかは、ある意味周りの人間は察していた。

「おかあさんーっめんなさいー!」

ある休日の日、いつも通り外に遊びに行っていたみほが泣きながら帰ってきた。特に謝られる心当たりのないしほは、彼女の謝罪の言葉に面食らう。

しかしそれも、彼女が両手で抱きかかえる傷だらけで中身の綿がはみ出たクマのぬいぐるみを見たことで、納得の感情の方が強くなったが。

「……治る?」

泣いて、目を赤く腫らしながらも訴えてくる我が子に、しほは少しだけ困った。

何故なら、その日は珍しく西住邸にはお手伝いが居なかったのだ。

ここしばらく忙しかったことと、家の事を頼りきりになっていることをどうかと思つたしほが、自身の休日に合わせて休暇を使用人たちに与えていたのだ。

その為、こういつた事が得意な人間が今この家には居なかった。

もちろんしほも裁縫はできるが、それはあくまで素人に毛が生えた程度で、ぬいぐるみの修繕を綺麗に行えるほどではない。

ならば使用人の休みが明けるまで待てばいいと思うが、それまでみほが落ち込んでいる姿を見ることを彼女もしたくはない。

「……少し待っていなさい」

頭を悩ませた結果、しほはそう言葉を残しクマのぬいぐるみと一緒に私室に消えていった。

それからたつぷり三時間以上経ち、泣き疲れたみほが慰めていたまほと一緒に寝付いたころ、しほはその手にクマのぬいぐるみを持って部屋から出てきた。

「私にはこれが限界なの。悪いけれど少しの間はこれで我慢しなさい」

寝ているみほの隣に、元の姿とは程遠いがはみ出していた綿が詰め直された、包帯だらけのクマのぬいぐるみの姿があった。

しほは裁縫はできなくても、戦車道をするうえで必修科目である応急処置や手当の要領で包帯などを使い、ぬいぐるみを補修したのだ。

もちろん所々歪ではあったが、それがその時の彼女の精一杯であった。

「おかあさん……………この子を助けてくれてありがとう！」

寝起きにそのぬいぐるみをみたみほは、数時間前の泣き顔は何処へやらといった雰囲気で満面の笑みを浮かべた。

後日、お手伝いさんが居る時に元の姿に戻すかどうかを尋ねた際に、みほはそれを拒否した。

「この子はおかさんが助けてくれたから、もう元気なの！」

その言葉にお手伝いの人たちの幾人かはみほのファンになったらいい。

もちろん、しほが行ったのはあくまでその場しのぎの応急処置だったため、みほが夜に寝ている間に本格的な補修が行われた。もちろん、身に着けていた包帯や眼帯といったものはそのままなのは言うまでもない。

「……………ということがあったのだけど、覚えていない？」

一連の説明を受け、しほは恥ずかしいやら嬉しいやらで顔にたまつた熱を嫌でも意識させられていた。

(……………忙しくて当時のことはあまり覚えていませんが確かにそんなことをした記憶が)

「それでその後放送が始まったボコとそのぬいぐるみがそっくり

で、みほはその子をボコと同一視するようになったんだと思う」

娘の理解できない趣味の発端が自身にあったことを嘆くべきなのか、そこまで信頼してくれている娘に嬉しくなればいいのか分からないしほは考えるのをやめた。

「しほさん、トイレに行きたいのですが付き添ってもらっても？」

その様子を察した彼は気遣うように自身の要求を口にした。

クールダウンの為に暖かい部屋よりも、空気の冷たい廊下に出た彼女は手早く彼の介助をしながら、早々に廊下に出るのであった。

「……………それで、みほはその時の事を覚えているのか？」

テレビからは相変わらずボコの映像と音楽が流れ続けるなか、画面から視線を逸らすことなくまほは問いを投げ掛けた。

「……………知らない」

消え入りそうな返答はあった。しかし、耳どころか首元まで真っ赤に染まったみほの様子はその質問の答えを如実に表していた。

おまけ

妻「それにしてもよくあのクマの名前を知っていましたね」

夫「昔、作曲の依頼が来てね。OPとEDと挿入歌をそれぞれ書いて提出したのだけど、起用されなかった」

妻「え？」

夫「僕の作った曲だと、ボコが勝っちゃうかもしれないから使えないって言われた」

妻「なんて？」